

# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

月 報 I  
第 1 卷  
1983年 2 月

## 目次

同志社の人びと	鯨坂二夫	1
新島襄のうけた教育	竹中正夫	3
On the "Complete Works of Nijima Jo" — John W. Hall	W. Hall	5
編集余録	河野仁昭	8

同朋舎出版  
京都市下京区  
中堂寺鐘田町2

## 同志社の人びと

鯨坂二夫

「私は同志社で人間を学び、関西学院で世界を学び、早稲田で日本を学んだ」、永井柳太郎はよくこのように言われたという。令息永井道雄さんから直接に承ったことである。

足に障害のあった永井少年に対し郷里金沢の中学校は入学の許可を与えなかった。足が悪い、体操ができない、兵式教練など到底無理である。頭脳明晰でも中学生として受入れることには問題がある、おそらくそのような理由からであつたろう。富国強兵が国是であり、軍国日本が旗印であつた我国の当時の教育行政は、ごく一部を除いては、このような立場で行われた。柳太郎少年の無念の程が察せられる。同志社はそれを救った。同志社のキリスト教主義、

具体的には新島襄先生の信仰がそれを敢てせしめた。私はペスタロッチーの『隠者の夕暮』の冒頭の言葉を思い出す。「玉座の上にあつても、貧しき陋屋にあつても、人間とし

て何の別もない人間。その人間とは何か。……」

私は青年の日、柏木時代の内村鑑三先生の教を受けた。私が京大の学生になった年、先生は逝かれたから、晩年であられた。それでも意気旺んなことは筆舌に尽くし難い。畔上、塚本というような諸先生が前座をつとめられ、そのあとで先生が壇上に立たれたが、ほとぼしる言葉には完全に打ちのめされるほどの強さと熱気がみちあふれていた。信仰の人とはこのようなものかと感じ入るばかりであつた。折から、軍国日本であつて、現代の人々には到底想像もつかぬほどの時の勢であつたが、その中にあつてよく言われた。「軍隊と雖も、財閥と雖も、貴族と雖も恐れてはならない。常に、ただ独り神のみを恐れよ」と。その著『代表的日本人』や『後世への最大遺物』を読んで、人びとの感じとるものが、まさに、それであつた。

その内村先生が新島先生について語られたことがあつた。そのせいにか、私にはこのお二人が極めて近い性格に於て感じられるのである。もちろん、その個性の別と、その歩ま

れた道の相違は当然ながら、私はその信仰の純粹さに於てほとんどへだたりを見ることができないのである。今でも同志社大学の正門に立つて、正面の老樹の下に置かれた石碑に、新島先生その人の書になる「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」の文字を仰ぎ、私はそれが新島襄先生の言葉か、内村鑑三先生の言葉かと判断に迷うのである。

私は以前、同志社大学で講義する光榮を与えられたことがあった。教育課程論であつたが、栄光館で礼拝の時間があることを聞いたのは、出講後、間もない頃であつた。そして、それは良いことだとひそかに思ったことである。京都大学には望んでもそのような時間はなかったから。ところが私の驚いたことに、その参加者が数少ないというのである。私はそれから、私の講義に出席してくれた学生諸君に「私の講義は欠席してもよい、栄光館の礼拝に出給え」と訴えたことであつた。あの美しいパイプオルガンの音に聴き入るだけでも、心を洗われる筈だがと、今も思うことである。

故湯浅八郎先生のお伴をしたことがあった。車中——京大農学部あたりの通りながら——先生がしんみりと言われたことを思い出す。

「私が京都大学のために残したただ一つの良いことがあります。それは戦後文学部に、それこそ国立としては、は

じめての講座、基督教が設けられた時です。担当の教授として、当時同志社大学の教授であつた有賀鉄太郎君を所望されたのですよ。私は有賀君から相談をうけましたが、はつきりと申しました。是非行つてあげ給えと。国が、はじめて国立大学に基督教を設けた意味を十分わきまえて、力を貸してあげなさい。同志社は心配ない、と積極的にすすめましたよ。同志社の内部にも、有賀君に対して、いろいろな批判があつたと聞きましたが、あれは私が強く推した結果実現したことで、有賀君が私学を捨てて、官学に行かれたのではありません」。

私はこのことをいつか書き残したいと思つていたが、今は亡きお二人の先生方、そして、同志社大学と京都大学のよしみを思い、遠く新島襄先生に発し、脈々として同志社大学に続くキリスト教の信仰をめぐつての秘話を、今、ここに明確にとどめたい。

晩秋の一日、私は妻を伴つて、久方振りに新島襄先生の旧宅の跡を訪ねた。日本も、京都も、同志社も、何という激しい変り方であろうか。しかし、その中であつて、門前に佇んで先生を偲ぶ情の切なさは変らない。その先生の全集がまとめられ、新たに出版される。慶賀この上もない企画であると言ふべきであろう。



## 新島襄のうけた教育

——校章の考証から——

竹中正夫

新島襄は、一八六五年七月にボストンに着いて、一八七四年一〇月にニューヘーブンでハーディ夫妻と別れて帰国の途につくまで、ニューイングランドにおいて教育をうけた。その間、文部理事官田中不二麿などの随行員として欧州に赴いたことがあったが、彼は専ら、ニューイングランドで学んだ。フィリップス・アカデミー、アーモスト・カレッジ、そしてアンドーヴァー神学校と当時のニューイングランドが与える最高の教育をうけたといってもよい。

新島にしてみれば、ニューイングランドは全く未知の地であり、迎えてくれる知人や、奨学金を出してくれる学校があらかじめあったわけではなかった。現に、ボストンの港について、乗組員たちがみな上陸したあと、テイラー船長に留守番を命ぜられ、船内の掃除をなし、総身に痛みを覚えて新島はつぎのようなうたをよんでいる。

かくまでとかねて覚悟はせしなれど

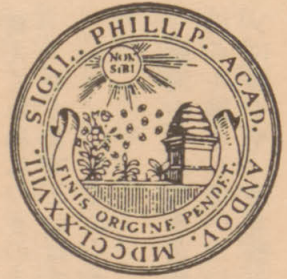
かくかくかくとかくはおもはじ

航海中、幾度か苦難にあうたびに、ボストンに着けばと自らを励ましていたにちがいがなかった。しかるに、ボストンに着くや、南北戦争によって、物価は急上し、アブラハ

ム・リンカーンの暗殺の報道に接し、ただならぬ変動を覚えるとともに、前途に不安を感じていた。だから、彼は、アルフューズ・ハーディと出あって、その後援によって、フィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジに学ぶようになったのは、思いもかけない倖いであつた。新島が、一八七九（明治一二）年六月一二日同志社英学校の第一回卒業式において、卒業生たちを送るにあたって、「不思議な御手は、あなたがたを守り導くであろう」といったのは、彼自身の体験に基づいてのべたものであつた。

新島がはじめに学んだフィリップス・アカデミーは、一七七八年、四月三〇日に創設された米国最古の全寮制度の高等学校である。創設いらい男子のみの学校であつたが、一九七二年から男女共学校となり、現在は、約二、〇〇〇人の一五歳から一八歳までの若者たちが、二四時間、生活を通して研鑽に励んでいる。ちなみに現在の経費は授業料と寮費などを含めて年額七、二〇〇ドルである。

フィリップス・アカデミーの紋章は、一七八二年米国の独立戦争の立役者となつたポール・リヴィヤーによつてつくられたものである。マサチューセッツ州の知事、ジョン・ハンコックがその寄附行為の署名人であり、初代大統領のジョージ・ワシントンはその甥を学ばせ、アンクル・トム・ス・キャピンの著者、ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人は晩年アンドーヴァーに住み（二八五二—九六）、その墓は、フィリップス・アカデミーの墓地にあるなど、アメリカ史にとつてもきわめて由緒ある学校である。



フィリップス・アカ  
デミー校章

さて、ポール・リヴィヤー  
が製作した校章には、二つの  
メッセージが宿っている。一  
つは「終りは、はじめによつ  
てきめられる」(FINIS ORIGI-  
NE PENDET)ということばで  
ある。よい出発をなし、よい

基礎を築いたものは、最後の栄冠を得るという意味に解す  
ることが出来る。第二のメッセージは校章の上部の方に、  
さんさんと輝く太陽があり、その下に、巣にむらがる蜜蜂  
がえがかれ、太陽の中にラテン語で NON SIBI (自分のた  
めではなく) と記されている。蜜蜂のように勤勉に励み、  
自分の利益のみを追求せずに、他者の倖せのために働くも  
のとなれという意味がこめられているように思う。さすが  
に銀細工師をしていたポール・リヴィヤーが作っただけあ  
って、なかなかこつた校章である。新島は、たびたびこの  
デザインをみながら、勉学の日々を送ったにちがいない。

アーモスト大学は、一八二一年に、ハーバード、ウィリ  
アムスにつぐ第三のマサチューセッツ州におけるカレッジ  
として同州の中南部に創設された。その校章には、一八二  
五年とあるが、この年に寄附行為の認可があったことを示  
している。上の部分にやはり太陽が輝いている。その下に、  
開かれた聖書があり、その間に、TERAS IRRADIANT  
(世界に太陽を)の文字が刻まれている。太陽と開かれた聖書

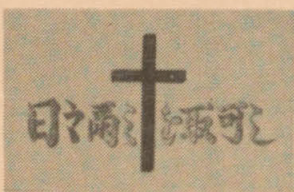


アーモスト大学校章

とが出来る。

これらの校章は、学校の公文書や調度品、図書館の書物  
などいたるところにみられるものである。新島は日いつる  
国、日本からはるばるやって来て、太陽を中心にかかげた  
校章を毎日のようにみて感慨を深くしたにちがいない。

アンドーヴァーに再び帰って、新島は神学を学び、牧師  
となる準備をなした。一九五七年、ニュートンセンターの  
小高い丘の上にあるアンドーヴァー神学校をわたしがたず  
ねたとき、ダブネー元部長が、新島の直筆をみせて下さっ  
た。それは横書きで「日々爾之十を取可し」と記してあ



新島の直筆

った。十字架と書かずに、十を象徴  
的に書いているあたり、絵心のある新  
島らしいと感銘した。今回アンドーヴァ  
ーニュートン神学校を訪ねたおり、ペ  
ック部長に、その所在をたずねたとこ  
ろ、それは、セーラムのビーボディ博  
物館に保管されているということであ  
った。セーラムはボストンから約四〇

は、当時のニューイングランド  
のピューリタンたちが好んで用  
いたシンボルであった。神の言  
である聖書と、すべてのものを  
照らす神の光とをうけて、世界  
のどこにおいても、世の光たれ  
というメッセージをくみとるこ



分ほど北に海岸ぞいを上ったところにある港町で、ナタナエル・ホーソンがつとめていた税関や「七つの軒のある家」などのある古風な町で、ピーボディ博物館は最近新築され、日本関係のものが集収されている。館長の案内で地下室の収納庫のファイルの中から、二五年前にみた新島の直筆をみたときは、変らぬ旧友にあったようなよろこびで一杯であった。

裏面をみる。Joseph Neesima, Day by Day thy, Cross take up, "Nitchee nitchee nangino jujika torubeshi" 69 とある。おそらく一八六九年のもので、彼のアーモスト研学時代のものである。このことばは、ルカによる福音書九章の二三節からとられている。前途の不安、辛酸の歲月にあって、新島はこの聖句を標語として、自らを励まして勉学の日々を送っていたように思われる。もう一つピーボディ博物館には、新島の筆によると思われる絵があり、そのうしろには「やがてにわとりなきぬ」と記されている。これは、ペテロがイエスを三度知らないと言ふんだあと、まもなくにわとりがないたという聖書の物語からとられている。つねに目をさまし、誘惑におちいらないようにという自戒が含まれていることばである。

新島は、これらの紋章や聖句のメッセージに日々にあふれながら若き日の研鑽をつんだにちがいない。ニューイングランドの冬は長くそして厳しい。しかし、それはやがて開花する梅花にとって大切な修練の日々であった。

(同志社大学教授)

## On the "Complete Works of Niijima Jō"

John W. Hall

Like other first generation leaders of the early Meiji era in Japan, Niijima Jō was a man of great courage, energy, and sense of mission — a *shishi* in the true sense of the word. He was also a man of many parts, an actor on many different stages. So diverse were the varied aspects of his life and personality that it has been hard for those who came after him to grasp the totality of this remarkable person. Understandably those who would do so have tended to rely on legends or symbolic anecdotes to define the separate "Niijimas" that make up the composite reality.

There is first of all the youthful Niijima who risked his life to escape from Japan that had closed its doors to the outside world, a young man whose thirst for knowledge of Western civilization and Christianity was so intense that we are persuaded that his fortuitous encounter with the "Wild Rover" and his "adoption" by the ship's owners, the Hardys, was not accidental but rather the working out of a personal destiny. There is the Niijima of Phillips Academy, Amherst College, and Andover Theological Seminary where he prepared himself for the Christian ministry — a chapter in his life climaxed by his dramatic stand at Rutland where he demanded, and received, financial support to found a Christian college in his native Japan. There is the Niijima of the early years of The Doshisha

when it took all of his indomitable spirit to keep his band of Christian students together and to win the approval of the Kyoto government for the establishment of his school. There is the national and international Niijima of his late years devoted to fund-raising and institution building directed toward the transformation of The Dōshisha into a university. One could project many other images before the full composite would be complete.

There have been a number of efforts to record Niijima's life and to gather together his writings. But these efforts have been partial, often covering only one image of the totality, and many of these are by now clearly dated. For instance, in English there is the *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* written by Arthur Sherburne Hardy, published in 1891. This is a lively account put together by the son of Alpheus Hardy and himself a novelist of some experience. Being a work of tribute to both Alpheus Hardy and to Niijima, and being totally unannotated, one must accept the authority of the passages quoted from letters and diaries on faith.

More recent compilations and studies by scholars like Otis Cary are more carefully researched, as is the recently published four-volume *Doshisha Hyakumenshi*. This has set the stage for the compilation of a definitive "collected works" under the editorship of Professor Sugii and others. This massive undertaking to be published in ten volumes, proposes to take an entirely fresh look at the Niijima materials: his diaries, letters, speeches, and writings. It is the kind of dedicated editorial effort that Niijima has long deserved, one that will bring to

life the real Niijima in all his many guises. It is a project for which one has the highest expectations, calling forth the deepest expression of gratitude for those who have the responsibility for bringing it to fruition.

[全訳]

## 新島襄全集に寄せて

ジョン・W・ホール

明治維新の時期の他の指導者たちと同様に、新島襄もまた、偉大な勇氣とエネルギーと使命感にあふれた人物であった。彼は言葉の真の意味において志士だった。彼は有能の士であり、さまざまな舞台に立った役者でもある。彼の生涯と人格のさまざまな面はあまりにも多方面にわたっていたため、後世はこの注目すべき人物の全体像をつかむのに困難をきたした。彼を理解しようとした人々が、この新島という複合体を構成するいくつかの要因を定義するに当たって、伝説や象徴的な逸話に依存する傾向があったことは首肯できる。

まず、鎖国中の日本から死を賭して脱出をはかった、若者としての新島がある。西洋文明とキリスト教の知識に対するこの若者の渴望はあまりに強烈であったため、彼が幸福にも「ワイルド・ロウヴァー号」に出くわしたことや、彼がこの船の持主であったハーディ氏夫妻に「拾われた」ということは、単なる偶然ではなくして、むしろ不思議な



運命の働きであつたのだという説明に同意したくなるほどである。フィリップス高等学校、アーモスト大学、そしてキリスト教宣教のための準備教育を受けたアンドーヴァー神学校時代の新島がある。この時期のクライマックスはラットランドにおけるあの劇的な行動だった。彼はその時祖国日本に一つのキリスト教主義大学を建てるための金銭上の支持を要求し、それを与えられたのであつた。初期の同志社時代の新島がある。この時期に彼はクリスチャン学生の一団を結束させ、学校設立の認可を京都府から獲得するために不屈の精神を傾倒した。晩年の新島は国家的な存在であるのみならず、国際的な存在でもある。この時期の彼は同志社を大学にするために、募金と大学設立準備のために献身した。新島の全体像が完結するためには、このほかはまだ多くの新島像を打ち出す必要があるだろう。

新島の生涯を記録し、彼の書いたものを集めるために、これまでに多大の努力が払われてきた。しかし、これまでの努力は部分的なもので、全体像からするとその一部分を表現したにすぎなかったし、現在でははっきり言って古びたものである。たとえば英語の文献にはアーサー・シャバイン・ハーディによる、一八九一年発行の『新島襄の生涯と手紙』がある。これはアルフィアス・ハーディの息子であり、また彼自身いくらか経験を積んだ小説家でもあつた人物によつてまとめられた、活き活きした記録である。しかしながら、それはアルフィアス・ハーディと新島の両者に対する称賛の書であり、注を全く欠いているため、

引用されている手紙や日記はそのまま信じて受け入れざるをえないことになる。

オーテス・ケリーのような学者たちによる最近の編纂や研究は、近年刊行された『同志社百年史』四巻と同様、もっと注意深い研究の成果であるといえる。こういうものを基盤として、「全集」の決定版が企画された。十巻から成る予定のこの大型の企画は、新島の資料である彼の日記、手紙、演説、その他に対して全くフレッシュな見方をするようにいざなうものである。これは長い間新島が値いしてきた献身的な編集の努力の成果であり、さまざまな装いのもとにおける真の新島を甦えらせることになるであろう。これこそは最高の期待をもつて迎えられるべき企画であり、この完成に責任を持つ人々に対して、深甚の感謝をささげたいと思う。

(イエール大学教授)

[北垣宗治・同志社大学教授訳]



## 《編集余録》

同志社が『新島襄全集』の編集・刊行を計画したのは、一九六五年、創立九〇周年のときである。当初その中心にあった秦孝治郎理事長、生島吉造庶務部長、田中良一社史史料編集所長らは、この世にはもうおられない。うたた今昔の感に堪えぬ。

\*

人が代り時が移って、編集委員会の動きもいつしか停滞状態にあったところへ、編集局である社史史料編集所は、一九七七年から三カ年間に『同志社百年史』（全四巻）の編纂刊行に没頭せざるをえなかった。

\*

全集の編集作業が再開されたのは、一九八〇年四月で、同年一〇月に委嘱された新しい編集委員は、上野直蔵（総長・委員長）、高橋 虔、オーテス・ケーリ、北垣宗治、島尾永康、杉井六郎、園部望の七氏と河野仁昭。編集作業期間は一応向う三カ年を見込んだ。

\*

「原史料に忠実に、かつ読みやすく」というのが、新しい委員会による編集の基本方針である。だが、一方をたてれば片方たたくというケースが余りに多い。おそらく編集が完了するまで、委員会の議論は尽きないだろう。

\*

第1巻（第一回配本）を世に送るに当って、出版社および

社史史料編集所のスタッフ各位に謝意を表したい。一方ならぬご迷惑をおかけしている。また、読者諸氏にも、かわらぬご支援を心からお願い申し上げる次第です。

\*

当「月報」に掲げさせていただいた玉稿のうち、ジョン・ホール先生の玉章は、全集の内容見本のためにいただいたものである。字数の関係で、申しわけないことながら、見本には抄訳しか掲げられなかった。

（河野仁昭）

### 《新島襄全集全10巻内容》

- |            |                                   |
|------------|-----------------------------------|
| 第1巻 教育編    | 第6巻 英文書簡編                         |
| 第2巻 宗教編    | 第7巻 英文日記・紀行編                      |
| 第3巻 書簡編Ⅰ   | 第8巻 補遺・雑纂編                        |
| 第4巻 書簡編Ⅱ   | 第9巻 来簡編                           |
| 第5巻 日記・紀行編 | 第10巻 『新島襄の生涯と手紙』<br>（A・S・ハーディ 編著） |

■次回（第二回）配本4月 第2巻——宗教編

（解題・高橋 虔）

### 《好評既刊》

●第12回毎日社会福祉顕彰特別賞受賞

### 留岡幸助著作集

5 卷 菊判・上製・貼箱入・平均650頁  
全 各巻八五〇〇円 揃価四二五〇〇円

住谷悦治・留岡清男監修 同志社大学人文科学研究所編



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

## 新島襄と神戸女学院

岡本道雄

明治初年から各地に創設されたキリスト教学校の中で、新島襄の同志社は他のミッシオン・スクールとは明確に一線を画する〈ユニークな教育理念〉を持つ学校であった。キリシタン禁止の高札撤廃前後の状況下に出来たミッシオン・スクールの中には、「キリスト教の布教・伝道が困難だから英語塾を開く」といった成立事情を持つものも多く、このことが、特に明治二十―三十年代には、国家主義的教育家からは勿論のこと、同じキリスト教内部の内村鑑三からも、ミッシオン・スクールの教育は〈宗教的伝播の手段〉、〈伝道のための方便〉であるといった非難を浴びることになったのであり、確かに、そこには〈伝道〉と〈教育〉、〈教会〉と〈学校〉の機能的未分化も見られたのであった。

これに対して、新島の創設した同志社は、学校教育には固有の使命があり、固有の価値があることを最初にはつき

Ⅱ 報 月  
第 2 卷  
1983年 6 月

### 目次

新島襄と神戸女学院	岡本道雄	1
二つの喜び	手塚竜磨	3
墓前の感傷	小野高治	5
編集余録	河野仁昭	7

同朋舎出版  
京都市下京区  
中堂寺鍵田町2

りと認めたキリスト教学校であった。新島自身もとより敬虔な信仰者であり、またいくつかの教会の設立にも尽力した人であるが、「同志社大学設立の旨意」にもはつきり示されているように、彼の学校設立の目的は、〈基督教拡張の手段〉としての学校、あるいは〈伝道師養成〉のためだけの学校を創ることではなかったのである。彼は、「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ」という有名な言葉に象徴的に示されているような、明確な〈良心教育の理想〉――彼独自のユニークなキリスト教人格主義の教育理念――を高くかかげ、また彼のアメリカでの母校アーモスト大学のモデルにし、――そこでの十九世紀ニューイングランドの〈信仰復興〉を反映する、敬虔な宗教的雰囲気根ざした〈リベラル・アーツの教育〉を範とし――、これを通して一国の〈国民の教化〉を目指す〈品性の教育〉・〈全人の教育〉を目指したのである。

新島が、このような教育理想の実現に最も心血を注いだのは、もとより同志社においてであったが、しかし新島はまた同じ組合教会派のアメリカン・ボード所属の学校であ

った神戸女学院に対しては、少なからぬ関心を持ち、直接間接に神戸女学院と関わり、そのために尽力したことが、いくらかの資料からわかるのである。

神戸女学院の草創期には、同志社出身の二人の有力な教師がいた。一人は熊本バンド出身の同志社第一回生、吉田作彌（後のシャム公使）であり、いま一人は後の同志社総長、原田助である。吉田の就任にあたって新島がどの程度これに関与したかはわからないが、吉田は明治十二年からマウント・ホリヨーク出身のクラークソン校長を援け、神戸女学院をそれまでの伝道中心の学校から、リベラル・アーツに力点を置く学校へと転換させ、非常な教育的情熱を持って生徒達を指導し、その知的水準の向上のために大いに貢献したのであった。この吉田が外交官に転出した後、当時神戸教会の牧師であり、また同志社の社員でもあった松山高吉の勧誘によって吉田の後継者となり、神戸女学院でリベラル・アーツの諸学科を担当し、「天文学、文明史、物理史及び文章規範」を教えたのは、原田助であった。そしてこの際同志社の神学科に尚在学中であった原田を強く説得し、神戸に行くことを決意させたのは新島襄その人であったのである（『原田助遺集』）。原田が実際専任として神戸女学院に在職したのはわずか一年であったが、しかしその後原田が神戸女学院の精神的母体とも言うべき神戸教会の牧師を二度、十一年に渡って勤めたこと、また同志社総長時代の十二年間、彼は、同時に神戸女学院の理事としても尽力したこと等は、この原田を通して新島の教育理想が強く神

戸女学院に反映したことを物語っているのである。さらにまた新島自身が直接、神戸女学院や梅花女学校のために祈禱会を催したり、また神戸女学院を訪れ、〈女子教育〉について演説を行ったことも記録から伺えるのである。

しかも当時は交通が不便であり、京都と神戸の往来には相当の時間を要したにもかかわらず、同志社の初期卒業生、特に熊本バンド出身者の夫人に神戸女学院の初期卒業生が非常に多かったことも、この吉田や原田の存在や、また新島の影響もけつして無関係ではないであろう。ちなみにそれらの夫人とは、原田助夫人佐喜をはじめとして、金森通倫夫人こひさ、不破唯次郎夫人きよ、湯浅吉郎（半月）夫人辰、横井時雄夫人豊、村井知至夫人よし、麻生正蔵夫人きしよ、岸本能武太夫人とし、また中退者ではあるが、安部磯雄夫人こまお、下村孝太郎夫人とくの名も見えるのである。新島襄及び同志社の教育理想の直接、間接のインパクトは、神戸女学院に関係した宣教師を通してあらわれている。その代表的な例は、神戸女学院で戦前二十五年間院長を務め、卒業生達から慈母の如く慕われたシャーロット・B・デフォレストである。彼女は神戸女学院におけるリベラル・アーツを基盤とする女子高等教育の飛躍・発展に特に大きな寄与をした人であり、大正八年にはわが国では三番目の女子の〈大学部〉を作り、また今から五十年前に、神戸から現在の西宮の、約十倍の広さを持つキャンパスへの移転を成し遂げた人であるが、日本生れのこのデフォレストに大阪で幼児洗礼を授けたのは、実は新島襄であった。



デフォレスト女史の父、ジョン・H・デフォレストは、新島が同志社の設立を宣言したラットランドの集会ではじめて新島と出会い、共にアメリカン・ボードの宣教師として同じ船で来日した親しい友人であり、また仙台での東華学校の創立にも協力した人であった。デフォレスト女史は新島に洗礼を受けたことを誇りにし、新島や、また自主独立を尊重した父の考えを受け継いで、早くから神戸女学院の自主的な運営を考え、ミッション・ボードとの歴史的、精神的なつながりを大切にしながらも、神戸女学院が独立した法人になることを願い、大正十五年の「財団法人神戸女学院」の成立において、このことを実現したのであった。

さらに今一人、新島との関係で忘れることができないのは、アーモスト大学での新島の二級後輩であり、アンドーヴァー神学校を修了した後、新島を援けるために来日したオーテス・ケリー（現オーテス・ケリー同志社大学教授の祖父）のことである。彼はしばらく岡山で伝道した後、同志社神学校の教授として、同志社での教育にその一生を捧げたが、彼はまた神戸女学院のためにもいろいろ尽力し、神戸女学院にはじめて理事会が出来た時明治四十年には、その初代理事長を務めたのであった。そして同じくアーモスト大学出身のその息フランク・ケリー、またその妻ロザモンド・ケリー、またフランクの妹アリス・E・ケリー（アメリカン・ボード極東代表）も、あるいは理事として、また教師として新島・同志社・神戸女学院をつなぐかけ橋となった人々であった。

（神戸女学院院长・大学長

## 二つの喜び

手塚竜磨

待望久しかった『新島襄全集』の第一回配本、「教育編」を手にし、その内容を概観して二つの喜びに浸ることができた。一つは素朴な感傷からかも知れないが、創立百年の節目に、百年史に続いて、創立者の全集が日の目をみたことで、明治以後の日本の私学史にとり稀有であること、一つは同志社ほど建学の精神と創立者の教育理想が正しく継承・発展させられている学園は他のキリスト教系、とくにプロテスタント系大学にはみられないことで、この方はより基本的な観点からの喜びである。

頂点に大学をもつ慶応義塾は、創立者の生前・没後を通じて正・統の『福沢諭吉全集』を編んだ実績があるだけに、百周年を契機に六巻ものの「百年史」のほか、決定版ともいえる二十一巻からなる全集を出している。新島にくらべ活動期間が長かったから巻数の多いのに不思議はない。明治初期の数々のベストセラーも収められている。短命に終わった新島には著作らしいものはすくなく、ほとんどが短い演説や論説、同志社設立に関する趣意書、それに完全揃いでない「理事功程」の草稿が「教育編」に収められているにすぎないけれど、未発表のものが多く、建学に寄せた創立者の熱意と意図は十分にくみとることができる。この一巻には担当者の苦心の跡がみられ涙ぐましい。



国・公立と違つて、私学には創立者がいる。しかし複数の場合が多く、主役らしい人物はいてもその全集は望めない。百年史に併行して伝記が刊行されたにすぎない。プロテスタント系で百年史を出したところはあるが、日本人の協力者がいても創設の主導権はミッシェン側に握っていた。この場合も創立者の全集は求められない。同志社の場合、山本覚馬やデイヴィスをはじめとするアメリカン・ボードの献身的協力は忘れてはならないが、主役は新島であつて、このことが、おくれればせながら「新島襄全集」の刊行を可能にしたといえる。

もう一つの喜びは、同志社がさまざまな難関にまいながら挫折せず、困難を克服して、今日にいたるまで創立者の建学の理想を守り、英学・神学の学統を継承しながら総合学園としての広い裾野を開拓してきたことで、より大きな喜びをこの一事に抱くことができた。すでに百年を越す年輪を加える他のプロテスタント系学園を引き合いに出すのは不本意だがやむをえない。寛恕を乞う。

いま頂点に大学をもつプロテスタント系学園の母体はいずれも神学校であり、併行して生れた英学部門を吸収したときは神学部を筆頭に位置づけた。立教学院は最初から神学校(院)を別置する建前をとっていたが、戦時中軍部の圧力に屈して閉鎖、戦後再興したけれどいつの間にか消え去り、わずかに文学部の二部に「キリスト教学科」の異名を残すのみである。横浜のブラウン塾は英学塾から神学塾となりすぐれた人材を出し、東京一致神学校を経て明治学

院の主流「神学部」を形成したが、ブラウン門下の逸材植村正久の東京神学校に合流した。ミッシェンボードの支配から脱し分離・創立した植村の真意は高く評価できるし、同系譜なので発展的「廃部」といえないが、総合大学に神学部が欠落する主因の先陣となった。横浜の美会神学校は東京の耕教学舎と合体してのちの青山学院の主流「神学部」を成立させたが、大学になってからその学統を生かされず、文学部にキリスト教学科の名をとどめたのも束の間、それすら消滅したばかりでなく、閉鎖断行で訴訟沙汰までひき起したのはいたましい。

百周年にはわずかながら満たないが、横浜バプテスト神学校を源流とする関東学院には神学部はなく、仙台神学校を母体とする東北学院には文学部にキリスト教学科がわずかに温存されているにすぎない。いまプロテスタント系大学で神学部を置いているのは、同志社以外に関西学院と西南学院だけである。

日本では「神学」という呼称はなじみが薄い。クリシタン伝来後間もなく、各地に「コレジオ」と共に「セミナリヨ」が建てられたが禁教令に遭つて根付くまでに到らなかった。神学が再び導入されたのは幕末の開国以後のこと、主としてプロテスタント各派の宣教師たちによるものであるが、同志社の場合は事情を異にする。

米国で普通学のほか理化学と神学の専門教育を受け、田中不二麿に随行し欧米各地の教育事情をつぶさに視察して帰国した創立者みずから移植した神学だけに根付きも強靱



だった。専門学科として政経、哲学、文学、法律その他に先駆けて神学をとりあげ、キリスト教拡張の手段ではなく、また伝道者養成をはかるためでもないことを設立の趣旨のなかに披瀝していて、宣教師たちの意図したものとは違っていた。新島はおそらく、神学を単に思惟的、思弁的の学問としてではなく、より実践的なものとして捕えていたのではないだろうか。百余年にわたり同志社の神学部からはすぐれた学者、説教者を出しているなかに、留岡幸助はじめ多くの社会事業家を送っていることは、実践神学を重視した同志社神学の学統に由来するほころべき成果ではないだろうか。

先細りしている福祉行政のさなか、少年非行、校内暴力は激化の一路を辿っている。八十余年前、「家庭にして学校、学校にして家庭」をスローガンに掲げ、感化法制定を前に、あえて感化院の名称をさけ「家庭学校」を創設、非行少年の教護に生涯を捧げた留岡幸助の業績に思いをいたすとき、実践神学が解決しなければならぬ数多くの今日的課題を内包していることを知らされ、第二、第三の後継者の出現が待たれる。

いま東京には教団立神学大学以外にルーテル派大学がただ一つ、総合大学には皆無で、聖書神学校と農村伝道神学校が補完の役割を果しているにすぎない。これと対照的なのは学寮・学林時代の宗学に由来する三つの仏教系大学である。文、法、経済、商などの学部の上位に「仏教学部」を位置づけていることで、この現実をプロテストヤント系大

学の経営陣は注目し深く省思すべきであろう。

(元東京都政史料館長)

## 墓前の感傷

小野高治



新島襄の永眠を記念する一月二十三日の早天祈禱会に、今年も参加した。午前六時過ぎの若王子山道は、無気味なほど深い闇につつまれていた。懐中電灯をもってこなかった軽率さを悔みつつ、凍てついた道をこわごわ踏みしめてゆくと、後から灯を手にした人影が、次々に追いかけてきては、黙ってさっさと追い越してゆく。「お早よう」と声をかけてやると、可愛い挨拶が返ってきた。中学生らしい。「若い人の足は速いなあ」と、時々立ち止まって息を入れながら、年々老化する足を思う。

定刻六時半、当番校の香里高校の司会で開会、終りの賛美歌を歌う頃、ようやく空が白み始め、もうろうとしていた顔が、刻々と輪郭を現わす。どの顔も引き締まって美し



# 新島襄之墓

明治廿三年一月廿五日  
夫人眠也 孝悌新島氏之長眠  
追想之餘書之

新島襄墓碑拓本

く見える。

年二回の早天祈禱会、入学時の墓参、それに随時の自発的なものまで含めると、新島の墓前に訪れる人々の数は、毎年相当な数にのぼるであろう。まして新島永眠（明治二十三年一月二十三日）後から数えれば、その延べ数は、実に夥しいものになるだろう。日本に私学は数あるが、学校が管理する創立者および功労者の墓域をもち、没後も永く自発的な参拝者が絶えない学校が、どれだけあるうか。おそらく世界的にも稀有なものではないか。

新島は四十八歳で世を去り、同志社で働いた年月は、僅か十四年に過ぎない。にも拘らず、後世に遺した人格的影響の持続性は比類がない。古来各界に傑出した名を留める人は無数にいる。しかしその多くは、文字通り「過去の人」であり、在世中にどれほど名を挙げたとしても、時代を超え常に新しく問いかけ、近づく人々を奮い立たせる霊性の人は少ない。生前の業績からいえば、新島を偉大とすべきかには議論もあろう。今ここに世に問われんとする新島全

集についても、たとえば福沢諭吉全集や、内村鑑三全集の成果と比較して、うんぬんする人もあろう。普通、全集といえは、偉大な思想家・学者・文人の業績の集大成であるから、体系的な一冊の書物も書かなかった新島を同列に扱うことはできない。われわれがこの全集で読みとるべきものは、彼の業績の数々ではなくして、彼の生き様そのものであり、片言隻句からにじみでる新島的人格そのものとの出会いであろう。われわれはこの全集を通して、及ぶべくもない「偉人」や「聖人」の前に跪かされるのではなく、むしろ普通の人間でありながら不思議な人格的魅力をもった新島と共に歩む問題を提起されるであろう。

もう一度墓地に返ろう。私が同志社に入学したのは、昭和十八年であった。予科の倫理の科目で、森中章光著「新島襄先生の生涯」をテキストに、英語の井上健三先生から新島伝を教えられたのが、新島を知った最初であった。同時に私は北尾敬和という一人の友人を得た。彼は新島の生涯に深く感動し、当時としては遙々安中まで訪問してその感動を私に伝えた。その感化で私も素朴な新島教徒となった。私たちは月に一度墓地を訪れては、人生や世界を語り、戦時下の悲憤慷慨を共にした。やがて彼は結核に侵され、戦後まもなく世を去ったが、爾来若王子墓地は、折にふれ事にふれて訪れる私の聖地となった。

鞍馬石の自然石を用いたあの墓碑を、私は何度見つめてきた事だろう。キリスト教徒として、お墓を拝み、故人の冥福を祈るというのではない。それは新島の生涯と同志社



に思いを馳せ、また自分をみつめる場所である。もちろんことさら墓前でなくてもできることである。ただ特別に気分がよい環境というのみである。一種のレクリエーションといってもよいのかもしれない。明治二十四年一月の墓碑建立以来、八十年の風雪にさらされ、風化も進み、若干の剥落も目立つとはいえ、勝海舟の見事な字を刻んだこの墓碑は、この上なく品格が備わっており、長く使いこまれた名茶器の如く、歳月を経ることなくしては熟成しない独特の味わいがある。

残念なことに、この愛すべき碑を、新しく建て替える計画が進んでいる。「このまま放置すれば更に劣化が進み、将来見るに忍びない状況を生みだすおそれがある」からだとされている。当局もそれなりに種々研究し、ひそかに各方面の専門家の意見を徴したようであるし、当局が校祖の偉業を讃え継承する意図から発していることも疑わない。しかし私はひたすら悲しい。物質はすべて古くなり、やがて朽ちてゆくのは当然の姿である。しかしそれを「劣化」と評価するのはいささか傲慢ではないか。朽ち減びてゆくことの中に、美があり、風情があり、それを「見るに忍びない」ときめつけて新しく取り替えようとする発想に、私は——当局者の主観的な意図とは別に——非情さをみる。墓の倒潰によって人命に損傷が起るような状態に今あるわけではないし、墓をとりかえれば、新島精神が一層高揚されるような状況では更でない。

人生の半分以上を、あの石と語ってきた私にとって、「見

るに忍びない」のは、むしろ現代の銘石を使って、壮麗に建て替えられたのを見る時ではないか、という恐れがしてならない。もちろんこれは理屈外の主観的な情念であつて、キリスト教本来の原理からすれば、墓がどうなろうとさしたる問題ではない。新島自身も死に際して、木標一本立ててあればよい、と言ひ遺している。元来墓の建立自体が、故人を敬慕する生存者の理屈外の情念の所産であつてみれば、「少なくとも、もう少しそつとしておいてほしい、もう少し」と真剣に心配している人達の氣持を汲んでほしいと思うのだが。

(同志社大学経済学部教授)

### 《編集余録》

新島襄の自筆史料のうち、説教・宗教演説稿、その他宗教関係の草稿をもつて、この第2巻を編んだ。彼が遺したこの種の史料は意外に多く、第1巻を超えるページ数になった。

### \*

徹頭徹尾教育者であり、かつ宗教家であつた新島は、同志社の充実発展とキリスト教の伝道を、文字どおり畢生の事業とした。その事業への献身によつて、生命すらすり減らしたのであつた。その意味でこの一巻は、第1巻「教育

編」とともに、彼の生の結晶だといつて過言ではないであらう。

\*

ただ、この巻に収めた史料の多くは、彼が同志社および近畿一円を中心に、日本の各地でおこなった説教や演説の草稿もしくはそのメモであり、だから未完成の文章が多い。抹消や補筆の跡が錯綜するその草稿は、彼の態度の真剣さをうかがわせるに足る。けれどもそういう史料なるがゆえに、判読に苦しみどころが最も多い巻であつた。それだけに文意の通りにくい箇所や、誤植かと疑われるような文言がなくはないことをお断わり申し上げておきたい。

\*

新島の宗教演説と書いたが、彼の場合、学術演説と宗教演説を截然と区分することはむずかしい。同様のことが演説と説教の關係についてもいえる。第1巻に収載した演説稿を併せてお読みいただければ幸いです。

\*

彼が説教等をおこなつた同志社關係施設のうち、明治十一年九月に竣工した彼の私宅（京都第二公会と、十九年六月に捧堂式がなされた同志社礼拝堂（重要文化財）は、ほぼ往時のまま現存する。明治九年九月に竣工した同志社最初の二棟の校舎のうちの棟（第二寮）は、改修の手が加えられてはいるが、いまは同志社田辺校地に移築保存されている。

\*

第5巻「日記・紀行編」と、第6巻「英文書簡編」は現在

印刷・校正が進行中です。第2巻は予想外に手間どりましたが、今後は極力、隔月刊行のペースにもっていきたいと思います。（河野仁昭）

〔新島襄全集全10巻内容〕＊印は既刊

- |            |                                   |
|------------|-----------------------------------|
| 第1巻 教育編＊   | 第6巻 英文書簡編                         |
| 第2巻 宗教編＊   | 第7巻 英文日記・紀行編                      |
| 第3巻 書簡編Ⅰ   | 第8巻 補遺・雑纂編                        |
| 第4巻 書簡編Ⅱ   | 第9巻 来簡編                           |
| 第5巻 日記・紀行編 | 第10巻 『新島襄の生涯と手紙』<br>（A・S・ハーデー 編著） |

■次回（第二回）配本9月 第5巻——日記・紀行編

（解題・島尾永康）

〔好評既刊〕

●第12回毎日社会福祉顕彰特別賞受賞

留岡幸助著作集

5巻 菊判・上製・貼箱入・平均650頁  
全各巻八五〇〇円 揃価四二五〇〇円

住谷悦治・留岡清男監修

同志社大学人文科学研究所編

同志社大学人文科学研究所編

松本平におけるキリスト教

——井口喜源治と

研成義塾——

A5判・箱入・430頁 定価 四、八〇〇円

ポルトガル・ブラジル文化への誘い

佐野泰彦著 A5判・290頁 定価 二、五〇〇円



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

III 報 月  
第 5 卷  
1984 年 6 月

## 目次

新島襄と病氣	長門谷洋治	1
新島の旧資料の新たな発見	和田洋一	3
札幌に於ける新島襄	末光力作	5
編集余録	河野仁昭	7

同朋舎出版  
京都市下京区  
中堂寺鍵田町 2

## 新島襄と病氣

長門谷洋治

申しわけないことに私は新島襄について多くのことを知らない。ただ幸いなことに新島の場合、その気になりさえすれば伝記も多く出ているし、なによりも一級史料たる日記・紀行、書簡の類を豊富に残してくれているので、材料にはこと欠かない。ありがたいのは『詳年譜』（森中章光編、同志社・同志社校友会発行、昭三四）という労作のあることで、一人物でこれだけのことが判っているのは稀有なことではあるまいか。

この巨人を私ごときが云々することは、もとより不可能であるが、人間を動的と静的に分けるとすれば、新島は明らかに動的である。

生涯に実に多くの人とあっている。有名な人・無名の人。そしてその中には何人かの医師もいる。彼は同志社に医学部設置の意志を有していたし、京都看病婦学校・同志社病

院を創始したこともあつて、外人・看護婦を含め医療関係者にはとくに理解があつたように思われる。

よく動いた新島だが、彼は決して健康に恵まれていたとはいえない。彼自身、外国滞在中に遺言を書く気になるまでの危機感におそわれたこともあるし、恐らく凡人ならば早くに挫折してしまつてゐることであろう。この新島を健康という面からみるということも、すでに先人によりなされてゐることであろう。上記のように彼についての情報は豊富であり、そのことは健康面に関しても例外ではない。彼が頭痛や不眠などについても記していることは、彼が筆マメであることもさることながら、これらが彼を悩まし、そのことにかなり神経をつかつていたことの証左でもある。う。生涯の病歴がこれだけはっきりと示されているのも、古今東西を通じてそう多くはないはずである。むろん現在とは診断・治療法も異なるので、多くの事実の記載があつても、ただちにその病名を類推することは困難でないかと思う。新島を健康面からみて私が気付いた一、二のことを述べれば以下である（年齢は数え年、主として北垣宗治訳『新島

裏の生涯』の年譜による。

まず左前額部のキズアト。これは幼時（八歳）にあやまつて転落したさい負傷したものであるという。二〇歳で眼病と不眠症を訴える。二二歳、函館でロシア人医師ゼレンスケに眼を診てもらっているが、これは彼が最初に接した外人医師であろう。三一歳、リウマチのため、ウイスバーデンで約五カ月の湯治、その後四二歳でもニューヨーク州のクリフトン・スプリングスでリウマチ治療を行っているので、彼の持病としてリウマチがあつたことはたしかであると思われる。彼は自分で心臓が悪いと記しているが、これもリウマチからきたものではあるまいか。しかし彼の命を奪つたのはリウマチではなかつた。彼の死亡診断書は東京の神田小川町にあつた有名な山龍堂病院院長、樫村清徳により発行されているが、『詳年譜』によりその一部を引用すれば以下である。

### 死亡證

#### 一、急性腹膜炎症

明治廿三年一月十六日発病

明治廿三年一月廿三日午後二時二十分

虚脱に由て死亡

右者当院治療の患者に候処前記の通り死亡候也

すなわち彼の死因は腹膜炎、つまり消化器系の疾患であつた。彼は明治二十二年一月二十八日、胃腸に激痛を覚え、

一二月一三日に東京に、さらに同二七日大磯に移つたが、翌二三年一月一日よりにわかには悪化したという。

彼はその先、同二一年四月に東大のベルツや橋本綱常軍医の診察を受けているが、このときすでに胃症状を訴え「診甚悪し。胃に水気多し」などと日記に記している。しかし、その後一応の恢復をみているので胃癌よりはむしろ胃潰瘍を考えたい。そしてそれが穿孔して腹膜炎となつたものであろう。現在なら死亡前年十一月の激痛を覚えたときに手術などの処置がとられるのかとも思うが、すでに彼は上述のごとく基礎疾患としてリウマチに因るであろう心臓疾患をもつており（このため、四六歳のときの渡米の計画を、同志社病院院長ベリーに阻止されている）、状態は複雑であつたと考えられ、現在でもかなりてこずる病状であつたろう。上記二一年四月二二日、橋本の診察を受けた日の日記に「診の悪き割に身体の挙動はあしからず。甚解し難き理由なり」と記し、午後には井上馨邸で政財界の有力者と大学設立について懇談。ところが「其中病変を生じ、脳貧血となる。席を退く（略）橋本を招く。来て龍腦丁幾を以皮下注射す」とあり、翌日にベルツの来診があり、「胃は余り悪しからず。水気なく脈搏も意外に良しとのこと」とし、五月には鎌倉の海浜院に入院している。とにかく病氣も氣になるが、それよりも学校のことが……と無理を重ねていたようだ。医師にとつては模範的な患者とはいひかねたが、おそらく彼の使命感に圧倒されたことであらう。そして医師が不思議がるほど、軽快への経過も早い。しかし同年七月二日の





久保田米僊 筆 新島先生臨終図

日記には「予の心臓病は全治を期すべからず（略）全治の望なきは己に知り又いつでも天父の招に応じ……」と述べ老母と愛婦に思い至って涙している。

彼の死亡した明治二三年は本邦新教史の上でもひとつの曲り角の年であるとされている。

つまり彼の後半の人生に一致して、日本のプロテスタントは大きな進展をみた。むしろ新島の貢献によりプロテスタントの大きな部分を占める組合教会が画期的な発展をみたというべきであろう。

まことにドラマチックな新島の生涯。ぜひ一度NHKの大河ドラマとしてとりあげて欲しいものである。

（日本医史学会理事）

## 新島の旧資料の新たな発見

和田洋一

新島襄がアンドーバー神学校に入学したのは一八七〇（明治三年九月、卒業したのは七四年七月である。途中、文部省理事官田中不二麿の通訳を仰せつかってアメリカ東部、ヨーロッパ各国の教育施設を見てまわるといったことがあり、一年半休学をよぎなくされた。そして七三年九月から一年間、アンドーバーで神学の勉強の仕上げをした。

そのときクラスメートの中にC・C・カーペンターという人物がいて、日本人学生ジョセフ・ハーディー・ニイシマに強い関心と愛情をいだき、『コングリゲーションナリスト』という会衆派の週刊新聞に新島にかんする記事が出ると、それをいちいち切抜いて保存していた。

一九一五（大正四）年日本人浦口文治がたまたまアンドーバーを訪ね、カーペンターと出会う機会にめぐまれた。浦口は同志社普通学校の出身者であり、当時同志社大学英文科の教授であり、ハーバード大学の留学をおえて日本へ帰るところであった。カーペンターは新島にかんする新聞の切抜きを一冊のノートに貼りつけ、それを浦口に贈り、浦口は新島襄没後四九年記念式るとき栄光館で講演をし、そのあと、カーペンターからもらった新聞切抜帳を同志社に再寄贈した。

その翌朝、『大阪朝日』の京都版、『日出新聞』（京都新聞の

前身などは写真入りで「貴重な切抜帳同志社に贈らる」「貴重な新聞切抜帳浦口氏から同志社へ寄贈」という見出しをつけて報道した。月刊『同志社新報』二月号も、もちろんこの出来事を報道したが、私はそのことを最近まで全く知らずにいた。

今から一一年前、私は、同志社大学の学生が同志社の創立者新島襄についてあまりにも知らないことを歎いて単行本『新島襄』を書いた。戦後出版された魚木忠一著の『新島襄』では、新しい資料にもとづいて書くという努力が払われていないので、私はその点かなり努力したつもりであったが、カーペンターの「新聞切抜帳」が同志社大学図書館貴重品室の中に埋もれていることについては、誰からも教えてもらえなかった。同志社では『新島研究』という雑誌が年に二回刊行されており、近く第六六号が出るはずであるが、これを通読してみても同志社の新島研究者はだれも「新聞切抜帳」について知らず、貴重な資料は同志社大学図書館の中にむなしく死蔵されたままになっていたのである。

私は最近、自分の保存している古雑誌、古新聞を整理し、棄てていいものは棄てるつもりで一つ一つに目を通していったところ、たまたま昭和一四年二月発行の『同志社新報』を見てハッとした。昭和一四年というのは、中国大陸で皇軍がかくかくたる戦果をあげ、いちばん調子のいいときだったので、あの頃の同志社の苦しさ、みじめさが『同志社新報』を通して判るかもしれないと思って保存していたの

だろうか、と私はそのとき思った。

ばらばらとページをめくっていくと一段見出しで「新島先生を描く貴重な『新聞切抜帳』」という記事があった。読んでみると、寄贈を受けた同志社関係者は歓喜し、現物は図書館貴重品室に保存されることになったと書いてある。

考えてみると、浦口氏が同志社に寄贈した日、昭和一四年二月二三日は、私が治安維持法違反の疑いで京都御苑の南の拘置所にほりこまれていたときであるから、寄贈の事実を知らないのはあたり前であった。

私の父和田琳熊は同志社に四四年間つとめ、大正初期は英文科の教授であり浦口と同僚だったのだから、昭和一四年二月二三日には久しぶりに同志社で顔を合わせたのではないかと想像される。(その時期の浦口は同志社を去り立教大学の教授となっていた。)私はその年の暮、自由な身になって家へもどったが、父は切抜帳の話はしてくれなかった。

今から一〇日前、私は同志社大学図書館を訪ね、貴重品もち出しの許可を得て毎日楽しんで読んでいたのであるが、興味のある部分を二つ三つここに書きしるすことにしたい。

新島が一八七四(明治七年)一〇月、いよいよアメリカを去って一〇年ぶりに日本に帰る直前、ヴァーモント州のラットランドで開かれた会衆派の年次大会に出席してお別れのあいさつをし、そのとき「日本に帰ったらクリスチャン・カレッジをぜひ創りたいので資金をカンパしてくれ」と頼んだ話は有名である。クリスチャン・カレッジは日本では「キリスト教主義大学」と訳されているが、新島は本当に



「クリスチャン・カレッジ」と言ったのかどうか、私は長いあいだ疑問をもっていた。大会の出席者は会衆派の人たちであり、プレスビテリアン派、メソジスト派、エピスコパル教会、カトリック教会にたいして多かれすくなかれ對抗意識をもっている人たちである。会衆派にぞくする新島が、「クリスチャン・カレッジ」を創立するといつても、きのうまで邪教の国であった日本にキリスト教主義の大学、会衆派系の大学が一体できるのかどうか、クリスチャンの教授が一体日本に何人いるのか、チャペルで毎朝礼拝すれば、それでクリスチャン・カレッジということになるのか、大会出席者は、あいまいだなあといいながら、新島の熱情と熱誠にうたれてカンパをしたのだろうかという疑問を私はもっていた。

ところがカーペンターの切抜帳では「日本で学んでいるクリスチャンの施設(Institution)のための資金」ということになっており、カレッジということばは避けられている。記事の筆者は先述の週刊紙『コングリゲーションナリスト』の記者であつて、その場にいたのであるから、この方が正しいのではないかと現在の私は思っている。

カーペンター自身は、新島の英語はトレラブルである、我慢できる、まあまあである、しかし彼のスピーチはタッチングでありインプレッシヴであると評し、タッチングを四度もくり返している。新島は、単に話上手、単に雄弁ではなく、きく人を感動させる、魂をゆさぶる、そういう話し方をする人であつたことを私は改めて感じさせられた。

日本の岡山の孤児院の話はくわしく報道され、朝鮮の若者七名の訪米記事は珍しいと感じた。同志社関係者はアーモストについて多く語り、アンドーバーについて語ることがやややすくなずるのとも感じた。

(同志社大学名誉教授)

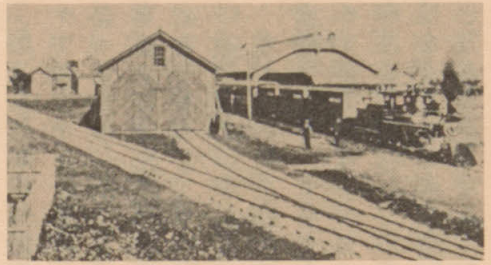
## 札幌に於ける新島襄

末光力作

新島は北海道に關係の深い人であつた。同時に北海道に非常に愛着を持った人であつた。こんな話がある。同志社の創設期、明治十二年末から十三年のはじめにかけて上級組と下級組との合併問題が持ち上がり、それに反対して学生がストライキをしたことがあつた。これがこじれて有名な「自責の鞭」の事件に發展するのであるが、新島はほとんど困りぬいた。彼は憂慮の余り自宅で独言のように「あれ程説き聴かしてもなお生徒が服しないのは、要するに私は校長たるの資格がないからなのである。私は寧ろ北海道へ行つて農業に従事しようか。」と言つて歎いたと伝えられている。

元治元(一八六四)年、新島は函館から米国貨物船ベルリン号に乗つて日本を出奔し、渡米したことはよく知られてい





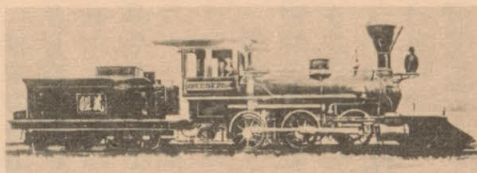
札幌停車場

るが、彼と北海道とのつながりはこれだけではなかった。新島は明治二十二年八月七年、静養のため一夏を札幌で過している。『新島襄先生詳年譜』を見ると七月七日札幌に到着し、九月十四日に札幌を去るまで二か月以上札幌ならびにその近郊に滞在したことになっているが、何故か不明の点が多く新島研究に於ける一つの空白の部となっている。わかっている主な点は、新島が日曜日に独立教会で説教をしたこと(七月十日)、佐藤昌介の案内で札幌農学校を見学したこと(七月十四日)くらいである。筆者は北海道に長く住んだこともあり、以前から在札中の新島の行動について興味を持っていたのである。

ところが最近、この空白を埋める新島書簡が二通発見された。一つは石狩郡当別村、柳内義之進に宛てたものである。発信地は札幌の寓居(札幌北四条東一丁目一番、富士成豊方)で、八月二十七日の消印がある。いま一つは帰京後、十一月二十一日札幌の橋仁に宛てた手紙である。二人とも札幌独立教会員で、手紙によると新島の在札中、教会員が新島の世話をしていたことがわかる。

明治十五(一八八二)年、市来知(岩見沢の近くで現在は三笠という。)に空知集治監ができた。初代の典獄は渡辺維精で彼

の日記によると七月二十八日、新島夫妻は札幌独立教会大島正健牧師と共に市来知を訪問、新島はそこで講演をしている。当時、小樽の手宮から札幌を経て幌内に至る鉄道が明治十五年に開通しており、義経号、弁慶号といった機関車が走っていた。新島夫妻らはこの汽車で市来知に行つたと考えられる。この講演が核となり、新島の勧めで空知教会が誕生したのである。明治二十四(一八九一)年には新島に学んだ留岡幸助が教誨師として着任し、ついで多くの同志社の出身者たちが続々と馳せ参じ教誨師となつて牢獄伝道に従事するのであるが、本稿ではこれ以上触れないでおく。



義経号機関車

さて新島は市来知からの帰路、騎馬旅行をすることが柳内宛の書簡でわかる。この旅行には夫人同伴ではなく、八重夫人は恐らく汽車で先に札幌に帰つたように思われる。この騎馬旅行の目的地はどこで、何のためであつたか甚だ興味があるが今のところ不明である。書簡によると旅行中新島の乗った馬は脚を痛めたらしい。あの辺一帯は沼地が多く足場の悪い土地である。恐らく馬が脚を取られて傷ついたのである。書簡ではさだかでないが柳内が市来知から新島に同行したのではないかと筆者は考えている。八月二十二日石狩当別の柳内家に新島は一泊し、翌二十三日



## 《編集余録》

例年になく、寒く長い冬であった。第5巻「日記・紀行編」の編集は、予想外に手間どつて、とうとうその冬を越えてしまった。刊行の遅延で、予約ご購入いただいた各位に、大変ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

\*

「解題」にも記したように、新島の日記には大別して二種類ある。ひとつは校務日誌あるいは社長・校長日誌とでもいうべきもので、それらは主として第1巻「教育編」に収載した。草創期の同志社の規模は小さく、教務・財務・庶務・渉外・募金などの業務はほとんど未分化だったから、社長兼校長であった新島は、直接あるいは間接に社内すべての業務に関与せざるをえなかったのである。そのことが日記の記載内容に端的に現われている。いまひとつは、それらより小型の、和綴じの手帖型の簿冊を用いたものである。型にも内容にも若干例外はあるが、これらは主として彼が旅行記を記したものであり、この第5巻に収載した主な史料がそれである。

\*

保養を目的とした二、三の例外はあるが、新島の旅行は伝道と大学設立資金の募金を目的とするものであった。その

（同志社大学工学部教授）

柳内家を出発、帰路につくのである。当別・篠津間の原野で風雨にあうが、何とか江別にたどり着き、汽車で帰札している。この書簡で新島は柳内に、馬は駅亭に預けて一兩日治療し、元気になったら駅亭から送りかえす様に依頼している。一方、橘宛の書簡によると、新島は治療費として何がしの金を駅亭に預けていることがわかる。そのうち一円五十銭が払い戻された様で、その辺の交渉は橘がやっている。また橘は新島の願いにより、新島のために土地を購入する交渉役を引き受けている。八十円は少し高過ぎる。六十五円位なら購入してもよい。一つ交渉して欲しい旨、新島は手紙で述べている。このあたり新島の人間味が出ていて甚だ面白い。新島が北海道に土地を購入する計画を持っていたとすると、先に述べた「北海道で農業をしたい」という独言も単なる言葉のあやではなさそうである。

札幌に帰った新島は八月二十七日から二十九日にかけて大島正健やその他二三の教友と定山溪に行っている。ここは温泉地で、新島はゆっくり湯につかって空知旅行の疲れをいやしたことであろう。

新島の札幌滞在中の行動には、まだまだ不明の点が多い。その中かなりはつきりする時もあるうと思われるが楽しみである。

向いたものだと驚嘆せざるをえない。彼は後半生において、

二つの重大な責務を自己に課していた。ひとつは、キリスト教主義による学校同志社を維持経営し、更にはそれを大学の境に進ましめて教育体系を完成することであり、いまひとつはキリスト教による日本人民の救済であった。寸暇を割いての旅行は、その二つの目的のためのもので、遊びの余地も緊張を解くいとまもほとんどなかったであろうと思われる。いくらかほつとした気持にさせられるのは、八重夫人をともなつての旅行記をしるした部分を読むときぐらいのものであつた。

\*

新島襄には自叙伝がない。わずかに第10巻『新島襄の生涯と手紙』の中に含まれている“*My Younger Days*”「私の若き日々」(この表題は後の人によって名づけられた)があるのみだ。だが、この第5巻を編集してみてもしみじみ思ったことは、「これは意図せざる新島の自叙伝ではないか」、ということであつた。そういう読み方もできるものであることは、おそらく、大方の読者の異存のないところであろうと思う。

\*

この巻には、新島の詩歌も収載した。彼は旅行に携えて行つた日記帖や書簡に詩歌を記したままにすることが多く、それをあらためて揮毫することは稀であつたようだ。時間的な余裕を、病氣療養中をのぞいてほとんどちえなかつた彼には、作品に十分手を加えたのち揮毫するようないまはなかつたはずである。

和歌・俳句はともかく、晩年には唐詩・漢詩の書籍をもとめて、折おりひもといていたことが日記にうかがえる。心に残つたらしい詩句を書抜いている。元來詩ころのあつた人だから、もう少し生を長らえて時間的余裕をもちえたなら、より円熟した詩境をひらいていたのではないかと、その点でも、繁忙の渦中における急逝が惜しまれてならない。

\*

編集所ではいま、第3・4巻「書簡編」、第6巻「英文書簡編」および第10巻『新島襄の生涯と手紙』の原稿作成をほぼ終え、すでに再校の段階に入っているものもある。一九八四年度においては、極力定期的な刊行を実現したい。ひたすらそう願っている次第である。(河野仁昭)

《正誤表》

第1巻		誤	正
六一二頁	11行目	女紅場	女子塾
六一六頁	4行目	明治十三年	明治十四年
六二〇頁	6行目	二月十五日	二月二十五日
第2巻			
口絵二頁		1816—1887	1815—1887

■次回(第四回)配本7月 第6巻——英文書簡編

(解題 オータス・ケリー)



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

IV 報 月  
第 10 卷  
1985 年 5 月

## 目次

新島襄のヨーロッパ初体験	川西 進	1
新島襄と『理事功程』	小林哲也	3
新島先生の恩人への墓参(上)	井上勝也	5
編集余録	河野仁昭	8

同朋舎出版  
京都市下京区  
中堂寺鍵田町2

## 新島襄のヨーロッパ初体験

川西 進

待望久しかった『新島襄全集』が着実に刊行されていくにつれて、これまで欠落していた、あるいは虚構によつて補われていた新島襄の全体像が徐々に浮かび上がり、同時にその光に照らされて、日本と世界の歴史に関わるような出来事の新しい局面が見えてくるのは、誠に楽しくも有難いことである。本巻で初めて訳出されたA・S・ハーディーの『新島襄の生涯と手紙』も、新島に関心を寄せる人だけでなく、多くの日本近代史の研究家に、従来入手し難かつた貴重な情報と示唆を提供することであらう。

その中でとりわけ私の興味をそそるのは、新島襄のヨーロッパ体験である。日本脱出後、ピューリタニズムの精神の横溢するニュー・イングランドのハーディー家、フィリップス・アカデミー、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校で教育を受けた彼が、初めて「旧世界」を訪れたとき、

どんな衝撃を受け、それをどう受け留め吸収していったのだろうか。またその個人的体験と、田中不二麿に随行してヨーロッパの教育制度を視察するという公けの任務とはどのように結びつき、作用しあつたのだろうか。岩倉使節団の米欧回覧の中で新島の果たした役割は何だったろうか。これらの問題については、『全集』の既刊のものや、別の形で既に公刊されたことのあるものだけでなく、『全集』の第6巻、第7巻で初めて公けにされるといふ新島の英文書簡、英文日記、紀行などを讀んだ上で、じっくり考えるべきことではあるが、取りあえずいま念頭にある二、三の点を述べ、今後同学の方々による研究の進展を期待することにした。

いま述べた新島の個人的なヨーロッパ体験を考えると、真先に私の頭に浮かぶのは、ヘンリー・ジェイムズが彼の小説や短篇の中で繰返し描いたアメリカ人たちである。彼らは多くニュー・イングランドに生まれ育ち、ヨーロッパに渡つてその成熟した文化に深い衝撃を受ける。ある者はその豊かさに魅惑され、その美に酔いしれ、自分を顧みて

絶望に捉われ、ある者は古い文化の頹廢と墮落を非難攻撃し自らの純粹を守るために殻に閉じこもる。ある者は無垢な精神につけこむ旧世界の狡猾な遊蕩者に籠絡される――。新島の場合はどうだったのであろうか。

新島がヨーロッパに向けて出帆したのは一八七二年五月十一日、その同じ汽船アルジェリア号に実はヘンリー・ジエームズも乗合わせていた。二人とも船酔いせず、甲板で過ごす時を楽しんだ手紙を書き遺しているから、互いに話を交わす折があつたかもしれない。それはともかく、船中の雰囲気はすでに新島にとってこれまでとは異質なものだつた。ハーディー宛の手紙で彼は次のように報告している。

航海中奇妙なことに気がつきました。誰もかれもが船上で何かを飲んでいます。何かの種類のアлкоールで、私がか心の底から嫌悪するものです。紳士も淑女も、それに神学博士たちでも何かを食卓に置いています。私としては水が腐らないで飲める限り、そういうものは飲まないつもりです。（『全集』第10巻、一五七頁）

しかしやがて新島は、ヨーロッパの日常における酒と水の役割が、当時のニュー・イングランドや日本の場合とは違うことを知ったのであろう。二ヵ月半後にベルリンからハーディー夫妻に送った手紙には

フランスを出てからというものが全然合わなくなりま

した。そのため新しい決断をして、新しい土地ではその地の水に慣れるまでうすめたワインまたはビールを飲むことにしています。アルコールの類を絶つて久しいものですから、少し口にただけで簡単に酔いがまわります。ピューリタン主義者にとって、これはかなりつらいことです。（『全集』第10巻、一六三頁）

とある。私はこういう正直に自分を客観視することのできる新島の人柄に惹かれる。こういう手紙の書ける人は信頼できるように思うのである。フランスに行った時、日曜日にソーヌ河で子供たちが釣をし、女たちが洗濯をしているのを見て驚き、パリの街路や建物の美しさに感心しながらも、フランス人が外観に意を用いて、心の中のことを疎かにしているのを憐んでいるのも、当時のヨーロッパを初めて訪ねたピューリタンとしては、極めて自然な正直な感想であらう。

一方岩倉使節団のために新島がどれほどの貢献をしたかについては、『全集』第1巻に『理事功程』草稿が収録され、その一部が明らかになった。ただ新島がもともと活躍したに違いない、アメリカとイギリスの教育制度調査の記録が散佚したのは、いかにも残念である。特にこの両国については、久米邦武の『米欧回覧実記』中の教育に関する概論が、『理事功程』の記事とほぼ同一のものが多く、新島の仕事事が『回覧実記』にまで及んでいる可能性も考えられるだけになおさらそう思う。一方ドイツに関しては、すでに指



摘されている通り、新島の草稿が『理事功程』に用いられていることは明らかである。具体的に言えば『理事功程』の巻八、巻九は、新島のドイツに関する三篇の草稿を要約、修正したものであり、巻十、巻十一は、新島の「普魯士の公学校の規則」に、新島の草稿には見当らぬ資料を大分加えたものである。一方「公学校生徒の規配」と題された草稿は、『理事功程』巻十五中のデンマークの「公学校生徒規則」に取り入れられている。これらの草稿はイギリスの文献の翻訳であり、新島がメリー・E・ヒドゥンに宛てた手紙の中の言葉によると「私がいままでにしたもつとも退屈なつまらない仕事」（一八七三年六月二五日付）なので、そこから新島自身の思想を読み取ることは出来ないが、これと『理事功程』とを綿密に照合し、何処が修正され、削除ないし追加されたかを明らかにすれば、田中理事官あるいは岩倉使節団の意図を説明する手懸りが得られるかもしれない。

最後に「大ブリタン寺院ノリポルト」は、『理事功程』に採用されることはなかったが、採用は不可能と思われるほど、新島の個人的な意見が強く出ている文章である。プロテストタントの立場からのカトリック批判に加えて、強く政教分離を訴え、日本政府にキリスト教の公許と信教の自由を望む新島の草稿は、新島がヨーロッパ滞在中に書き遺した最も重要なドキュメントの一つではなからうか。その公私両面にわたる意義が明らかにされる日を俟っている。

（東京大学教養学部教授）

## 新島襄と『理事功程』

小林哲也

『新島襄全集第1巻 教育編』に、新島が書いた「理事功程」草稿とみられる八編の史料が収められているが、十年ほど前に出された『理事功程』の覆刻版（臨川書店、昭和四十九年）に解説を書き、またそれを機会に一論文（『理事功程』研究ノート）京都大学教育学部紀要 第二〇号 昭和四十九年三月）をまとめ、なおその折に社史史料編集所のご好意で上述の生の史料を見せていただいたことなどを思い出しながら、新島の『理事功程』へのかかわりについて感想を述べてみたい。

『理事功程』とは、特命全權大使岩倉具視以下の遣欧米使節団に理事官として加わった文部大丞田中不二麿の欧米教育制度に関する報告書のことであり、明治六年九月にその一部が上申されたが、同八年十一月に十五巻の和装本として一括上申され、後、明治十年六月に一冊の活版本として出版された。それまでも欧米の教育制度については、福沢諭吉の『西洋事情』や内田正雄の『和蘭学制』をはじめとして、いくつかの著述や翻訳があったが、規模の大きな公的視察の報告書としてはこの『理事功程』が初めてである。とくにその中に含まれているアメリカとロシアの初等教育制度についての情報は、明治五年の「学制」後のわが国の文部行政に少なからず裨益するところがあつたとい

われている。

ところでこれだけの重要さをもった『理事功程』でありながら、実はこれが誰によって書かれたものかは必ずしもはつきりしていないのである。『理事功程』の田中による序文には、「其参考二供スヘキ者ヲ得ル毎ニ」すなわち「僚官ヲシテ之ヲ録セシメ帰ルニ及デ上書進呈セシ所」としか書いていない。僚官といわれる人々には随員として田中と行を共にした文部省の長与専斉、中島永元、近藤昌綱、今村和郎、内村良蔵らの外、明治五年三月から通訳として一行のアメリカ東部滞在からヨーロッパの八カ国の訪問まで従い、同七年一月にプロシアで別れた新島襄がいる。またこの外に一行を現地で迎え世話をした政府派遣の留学生も何人かいた。

文部省関係の資料は大正十二年の大震災の折に焼失したといわれ、また田中に関しては、この視察について一通りふれただけの回顧談「教育瑣談」（大隈重信撰『開国五十年史』上巻）の外には日記・記録の類がこれまでの所、一切見当らないため、『理事功程』がどのようにつくられたかは、右の人々その他に関する記録より傍証する外はない。田中の理事官任命、旅程などについては、岩倉使節団全般に関する諸史料などからもある程度わかるが、報告書の作成というような細かいこととなると、ごく近い関係者の記録によらないとわからないのである。

こうした点で、新島関係の史料はもつとも貴重である。事実、『理事功程』の作成過程を恐らくもつとも早く公的に

したのは、J・D・デイヴィスとA・S・ハーディーである。彼らは新島の書簡にもとづいて、彼が田中のために報告書をまとめたことを記している。ことにデイヴィスによる新島伝は和訳（明治二十四年、同三十三年）されることにより、この事実は少なくとも新島に関心をもつ人々の間に広く知られることとなった。大正三年に横山健堂（達三）は『文部大臣を中心として評論せる日本教育の変遷』を書き、その中の田中不二麿に関する一章に「米国主義と新島襄」の一節を設け、田中の米国教育についての啓発にもつとも大きな影響を与えた人物として新島を称え、デイヴィスを引いて『理事功程』が新島に負うところが大きいと述べた。この横山の見解は今日でも教育史研究者の間ではほぼ定説となっており、その後、公刊された新島の書簡集もそれを裏づけている。

しかし、では具体的に新島の書いた草稿がどのように『理事功程』にとり入れられたかという点になると、新島の書簡では不明である。そしてその点を明確としないままに、いつか新島の書いた報告書が「欧米教育事情調査報告」と固有名詞で呼ばれるようになり、それがそのまま『理事功程』の草案となったような解釈が、昭和三十年代に書かれた新島の伝記においてなされ、またそれが四十年代において代表的な明治教育史家によっても繰返されたのは残念なことであった。

この問題を解く正攻法は『理事功程』の内容を一つ一つ検討して、原典が何か、新島がかかわっていったようなものは



何かを調べてゆくことである。例えば、第八巻からの三巻はドイツの学校制度についての記述であるが、十巻の終りに、これは一八六九年の「英人アール・パティソン氏」の報告書の抄訳であると書かれてある。これは、イギリス教育史に通じているものには容易に推定のつく原典である。ただし、正確にはマーク・パティソンであるが。しかし、これが新島の訳になるものかどうかは、依然として不明である。

この点で、今回の全集編集は非常に大きな貢献をした。その一つは、第7巻に新島の在米欧中の英文日記を載せたことである。それは新島個人にとどまらず田中一行の動勢を克明に綴っており、まだ不明な点は多くあるにしても、これによりかなりの点が明らかになってきた。右のドイツ報告書というならば、田中、新島らはイギリスで教育長官に逢い、また、パティソンに逢ったかどうかは不明であるが、彼の同僚のマシユー・アーノルドと逢っており、その際にこの報告書を推められたであろうことは容易に推測できる。同様にして、第十二巻のリンダー氏述オランダ教育略則は、田中、新島らがヘーグを訪ねた折に面接して聞き取ったものということが、日記によって裏づけられるのである。

その二は第1巻所載の「理事功程」草稿に含まれる八資料であるが、この点については第1巻の解題に述べられているので繰返さない。これらによって新島の『理事功程』とのかかわり、ひいては明治初期の学校制度の発展とのか

かわりが少しずつでも明らかになってきたことは、大いに喜ぶべきことである。

(京都大学教育学部教授)



## 新島先生の恩人への墓参(上)

井上勝也

一九七七年四月から一年間、米国アーモスト大学へ新島襄の研究を目的として留学する機会が与えられた。その際新島の密航幫助に、そして思想形成に直接関係した人々を調べるうち、これらの人々の理解と協力・援助がなければ、我々の新島は存在しなかったと思うに至り、遂に彼らの葬られている場所の探索を始めた。一二〇年という長い歳月の経過を越えて、襄の息子の一人として、墓前で一言感謝の気持を表現したかったからである。「家」を中心とし、祖先を重んずる日本と違って、「個」を中心としたアメリカで

は、それが偉大な人物であっても、彼らがどこに葬られているかについての関心は極めて薄く、予想外に発見に苦勞した。しかし幸いにも帰国するまでに、新島の重立った恩人達の墓を見つけることができた。

(一) Capt. William T. Savory まず最初に挙げねばならない人物であろう。彼は一八六四年六月一日(旧暦)、新島を函館から上海まで、彼のベルリン号に乗船させてくれた。そしてその結果、彼は密航を幫助したことが船会社に見し、上海で解雇されるのである。これを知った新島は航海日記に「嗚呼予甲比丹をして不幸に陥らしむるは実に笑止千万(気の毒なこと)之事なり。然し過去事如何ともし難し。

他年学成の後彼に仕へ、万方其恩を報せば恐らくハ少しく予罪を償ふに至らん」(『新島襄全集』第5巻、四九頁)と記している。

彼が一八六五年七月二〇日、ボストン港に入港し、あと船番を命ぜられ、不安な日々を過している間に、Savory船長がひょっこり会いに来てくれた。新島はこの劇的な再会の様子について最高の喜びの氣持を日記に記している(『全集』第5巻、六八頁)。船長の墓地はマサチューセッツ州セイラム(Salem)の Harmony Grove Cemetery にあることが判つた。墓地管理事務所の埋葬記録によれば、Savory家の墓地には両親と彼の三人が葬られており、両親に囲まれるようにして彼が埋葬されていた。しかし彼の墓石が見つからない。管理人の話では氷や雪で墓石が割れると片付けてしまうという。彼は生涯独身であったのかも知れない。彼はユニテリアンの影響を受けたコンダグリーショナル・チャーチの

メンバーであつた。

(二) Capt. Horace S. Taylor 第二番目に挙げるべきはこの人であろう。一八六四年七月九日、上海で新島はワイルド・ロウヴァー号に乗り移ることができた。同号の船長 Taylor は約一年間の航海中、新島の誠実でひたむきな氣持を理解し、彼を弟のように愛してくれた。二人の間には民族を越えて大きな信頼の絆が生まれていた。船長が船主 Hardy 夫妻を紹介してくれなければ、新島の未来は開かれなかつたのである。新島はフィリップス・アカデミー、アーモスト大学在学中の三回の長い夏休みを、ケープコッドのチャタム(Chatham)にある船長の生家で過ごしている。

一八六九年四月、彼は船長の両親の金婚式のお祝いの会に招かれた。総勢四七人に及ぶ Taylor 家の親族の記念写真の中に、当時未だ子供のなかつた船長の実子のように、船長夫妻に囲まれて、新島の顔が写っている。八ヵ月後の同年十二月、船長は東ボストンの渡船場で船と岸壁にはさまれて亡くなった。アーモスト大学の寮で電報を受けとつた新島の驚きと悲しみは『全集』第10巻一〇七一一〇八頁に詳しく Taylor 家の墓地は南ボストンの Forest Hills Cemetery にあつた。墓石の表面は TAYLOR の文字のみで、裏面に両親と船長、最初の妻、再婚後の妻と一人息子及び姉妹と思われる人の名前が刻まれていた。船長の晩年には生後数ヵ月の一人息子がいて、父親の死の翌年亡くなつてゐる。管理事務所の埋葬記録によれば、息子の柩は父親の柩の上に重ねるようになつて埋葬されていることが判る。船



長はバプティストであつた。

(三) Miss Mary E. Hidden 新島は一八六五年十月から六七年八月までのフィリップスアカデミー時代にHidden家にホーム・ステイをしていた。『全集』第10巻や、アンドーヴァー・ニュートン神学校所蔵の五〇通近い新島のMiss Hidden宛書簡を読むと、新島が江戸とは全く異質の文化圏であるニューイングランドに飛び込んで、うまく適応できた背景にMiss Hiddenの深い配慮が感じられ、また新島は彼女を母親の如く慕い、何でも相談していることが判る。一八七〇年から七四年までのアンドーヴァー神学校時代も、キャンパスから歩いて数分の所にあるHidden家に新島は足繁く通つたであらう。典型的なピューリタンである彼女の生き方及び彼女に連れられて行つたOld South Churchでの教会生活や教会員との交わりが新島のピューリタンとしての思想形成に大きな影響を及ぼしたことは想像に難くない。彼女の墓は前述の教会の裏にある教会墓地にあつた。彼女はコングリーゲーションリストであつた。

(四) Rev. Ephraim Flint, Jr. 新島がHidden家にホーム・ステイしていた時、同家にはFlintという三七歳のアンドーヴァー神学校の学生が妻と一緒に下宿していた。長年アカデミーの校長を勤め、その職を捨てて牧師になるべく神学の研究を続けていたFlintは、極東から命を賭してキリスト教を学ぶためにやって来た新島に強い関心を示し、妻と共にキリスト教はもとより数学などの個人教授を引き受けた。Flint夫妻は、新島にとってフィリップス・アカ

デミーの教師以上に宗教上、学問上、人生上のよき相談相手であつた。子供のない夫妻は新島を可愛がり、彼はアーモスト大学在学中の三回の冬休みを、Flint夫人が病氣であつても、ヒンズデール(Hinsdale)の牧師館で過している。一年十カ月を同じ屋根の下に住んだFlintは、一八六七年八月、Hardy夫妻の求めに応じてアーモスト大学のSeelye教授に、次のような新島の紹介状を送つてゐる。「……彼(新島)は礼儀作法において紳士です。……彼は控え目で遠慮勝ちで、彼の本当の価値はすぐには現れません、しかし彼は最もすぐれた人間の一人であり、最も信頼するに値する人物です。彼の言葉は真実です」(『全集』第10巻、七九—八〇頁)。新島は一八七四年七月、アンドーヴァー神学校を卒業し、同年九月、ボストンのMt. Vernon 教会で牧師就任のための按手礼を受けた。Flint牧師は遙々儀式に出席し、愛する教え子新島の前途を祝福している。彼は故郷リンカーン(Lincoln)の生家の近へにあるThree Cornered Cemeteryに奥さんと並んで埋葬されていた。墓石にWELL DONEと刻まれているのが印象的であつた。勿論彼はコングリーゲーションリストである。

(五) Prof. Julius H. Seelye 彼は新島のアーモスト大学在学中、強烈な学問上、人生上の影響を与えた人物である。持病のリューマチに苦しむ新島を寮から自宅に引き取つて看護をし、Seelye教授が留守の時は彼に代つて新島に食前の感謝の祈りをさせている。一八八五年、新島は当時のSeelye総長に内村鑑三を強力に推薦することによつて、

彼をアーモスト大学の特待生にすることができたが、内村

は『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で、「総長先生彼自身にまさつて余を感化し変化させたものはなかった」

(岩波文庫、一五七頁)といわしめる程、彼もSeelye教授から強い人格的感化を受けている。Seelye教授は一八七二年、森有礼少弁務使の「教育が国家の物質的繁栄に如何なる寄与をするか」といったアンケートに次のように答えている。

「幅広い十分な教育によつてのみ国民はその富源が何であるかを、そしてこれらの富源を最高度を利用する方法を學びとることができます。……私共は宗教を徳の鼓吹者としてもたねばなりません。そしてそれ故に私は日本に十分で自由な宗教上の寛容を願ひたいのです。あらゆる宗教に門戸を広く開けて下さい」(『森有礼全集』第三卷、六八―七二頁)。

日本政府の外交官にキリスト教の解禁の必要性を説き、合せて教え子新島の帰国の道を開こうとする恩師の暖かい思いやりがうかがえる。一八九〇年まで一四年間アーモスト大学の総長を勤め、政治家としても大きな影響力のあつたSeelye教授の墓はアーモストの町S Wildwood Cemeteryにあつた。墓石にはHE THAT DOETH THE WILL OF GOD ABIDETH FOREVER。(「神の御旨を行う者は永遠にながらえる」)ーヨハネの第一の手紙二―一七)と刻まれていた。彼はコングレゲーシヨナリストであつた。(次号につづく)

(同志社大学文学部教授)

## 《編集余録》

全集の刊行が大変遅延していますことをお詫び申し上げます。一九八五年度内にはなんとしても第3・4巻「書簡編」第6巻「英文書簡編」および第7巻「英文日記・紀行編」は刊行したいものと切願いたしております。

\*

第10巻『新島襄の生涯と手紙』の配本をみて、正直のところいささか愁眉を開くおもいである。新島永眠の直後に出版されたこの伝記は、新島に関する基本文献の筆頭にかぞえられながら、今日までその完訳がなかったのは不思議である。先年、J・D・デイヴィスによる伝記『新島襄の生涯』を、くだけた現代文に翻訳・刊行された北垣宗治委員は、この伝記もまた読みやすい現代語訳にされただけでなく、詳細な注解をつけられた。全集の導入部としての役割をも果たす巻だろう。

\*

一九八〇年の秋、新島襄全集編集委員会が発足して以来、委員長として督励してこられた上野直藏前総長が、昨八四年十月二日に永眠された。生前に全巻完結できなかったことが悔やまれてならない。

後任の総長には松山義則元同志社大学長が、一九八五年四月一日に就任され、編集委員長のお仕事もひき継がれることになった。一日も速やかな完結を期したい。

(河野仁昭)



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

## 新島像

松山義則

私が新島襄という名を知ったのは同志社中学を受験するという小学六年生の時期であった。たまたま従兄の一人が同志社中学出身者であったこともあり、若い従姉も当時の同志社という名になにか西洋風のロマンを感じていたのか周囲のものたちのすすめにおされて私は同志社の校門をくぐった。正門から入って彰栄館への道の緑はまことにあざやかであった。キャンパス一面にはみずみずしいクローバがあふれるばかりに群生し、そして太く大きい枝をはる老樹の間に赤煉瓦の洋風建築がみえかくれていた。

入学して毎朝のチャペル礼拝で、またクラス礼拝で新島先生についての話を聞き、おのずと身近かな尊敬する人物として少年の私の心に生まれてきた。先生に直接教えを受けた堀貞一先生はじめ多くの方々の話の数々は強烈な感動をあたえるものであった。修身の時間にも聖書の時間にも

## 目次

V 報 月  
第 6 卷  
1985 年 9 月

新島像	松山義則	1
新島襄とその故郷	高道基	3
新島先生の恩人への墓参(下)	井上勝也	5
A.S.・ハーディーのことなど	オーテス・ケリー	7
編集余録	河野仁昭	8

同朋舎出版  
京都市下京区  
中堂寺鍵田町2

くりかえし新島先生が語られていた。私の同志社中学入学を祝って研究社の英和辞典とともに山本美越乃訳、ゼー・デー・デビス著、『新島襄先生伝』を従兄が贈ってくれた。これが私がはじめて手にした新島先生についての著書であった。おそらく彼が生徒時代に教科書として用いたものであったろう。新人生の私にはこの本はむしろあまり興味をそそるものではなかったが、ただ掲載されている写真は面白く、ことに、函館出奔のときのもも引き姿の写真は印象ぶかいものであった。その後、教科書として森中章光先生の著、『新島先生片鱗』を読むことになった。すでに聞き憶えていた先生の生涯がその書に明快に記述されており、少年の私は一行一行線をひきながら整理して頭に入れながら読んでいった。この本は名のごとくエピソード風に数多くの感動的な逸話が数百頁にわたってつづられている。この書から受けた感銘はいまも忘れられない。五〇年近く私は森中先生とはどんな方だろうかと思いがらお目にかかれる機会がなくすごしてきた。やっと数カ月前、新島研究会でご挨拶できる機会を得たのがはじめである。その後、新

島先生についてのすばらしい著書に数多くふれることになった。加藤延雄先生、和田洋一先生の著書からも多くのことを学んだ。また、北垣宗治先生のJ・D・デイヴィス著の『新島襄の生涯』は特記しなければならぬ。また徳富蘆花の小説からも、近くは福本武久氏の作品からも多くのことを学ぶことができた。

さきに書いたように、私が新島先生について学んだのは同志社中学での授業やチャペルにおいてであり、また幾冊かの著書を通してであった。断片的とでも言える先生の言葉や漢詩から読みとれる感動を通して、私は私なりの新島先生を心にうかべその先生を敬愛してきたのである。すでに歴史上の人物である新島襄を知るためにはその第一次資料を発掘収集整理することからはじめ、新島自身の手による文書など包括的な新島襄全集とも言うべきものの刊行を願う人々は多くあったと思う。

私はかつて歴史心理学に関心をもち、ことに自叙伝を用いる人間生涯の心理学の研究に従事したことがある。人間の生涯がもつ力動的な法則性を試論することがこのプロジェクトの意図であったが、過去の人物をできるかぎり正確に理解し、しかもその言動を生起させる心的動機を見出し構成することはまことに至難のわざと言うべきであった。

歴史的人物を理解し評価することは歴史学上の課題である。加えて、歴史小説はその人物史なり伝記に作家の洞察と情感をもつてその人物をえがき出している。資料による理解とともに歴史小説的把握は相たずさえてその人物像を力づ

よくうかび上げるのである。

新島先生は書簡の人であると言われている。新約聖書がその大半を書簡で編集されているように、書簡には常に明瞭な相手があり、発信者の心を受信者につたえ影響をあたえるものである。書簡の人とは人間の情感に生きる人と言うのである。書簡を通してわれわれはその人物の心の深奥にふれることができると思われる。

一九八〇年秋、一〇〇年に及ぶ念願であった『新島襄全集』の編集委員会が発足した。この発刊を決意し、編集の難事業を実行にうつされたのは上野直蔵総長であった。先生の卓抜たる識見と決断力そしてその指導力によるものである。社史資料室の河野仁昭室長をはじめ多くの委員の方のご尽力によって、その後『全集』はつぎつぎと刊行されており、その完結も目前である。

新島襄についての第一次資料の公刊は新島研究の学問研究を促進させるとともに、明治におけるわが国の教育事情をはじめ明治史の研究にも寄与することとなるであろう。そしてなによりも、新島先生を愛し敬う人々が、その心に感動をもつて宿すひとりひとりの新島像をより正確に明白にし、消えざる自己の魂のよりどころとすることができると思われる。

(同志社総長)



## 新島襄とその故郷

高道 基

新島襄の故郷安中には、彼の志を継ぐようとする人々によって戦後間もなく設立された新島学園がある。ここを母体にして一九八三年に女子短期大学が高崎市に開学された。高崎にはこの地を故郷とする内村鑑三の詩碑がたてられている。一九三〇年、病氣見舞に訪れた富岡の教会牧師住谷天来に示したもので、住谷は内村が心を許した数少ない「教会人」であった。

### 上州人

上州無智亦無才

剛毅木訥易被欺（欺むかれ易し）

只以正直対万事

至誠依神期勝利

内村は高崎藩の江戸藩邸の生まれであるが、一〇才の時から高崎に帰り、此の地を貫流する烏川で魚採りに熱中したというから、彼にとつてその故郷は忘じがたく、したがって「上州人」としての自覚、又は誇りは強くあつた。

これに比べて新島には自らを上州人と自覚する意識は稀薄だつたように思える。安中藩の江戸藩邸で生まれ、幼少期を送り、漸く一七才にして藩主の護衛役として初めて安

中の地を踏んだ彼に、郷土望景の詩がないのも無理ではない。脱国航海の途次、孤独感の中で夢みた「故園の花」とは安中で殊にも美しい梅林の花であつたのだろうか。ただ一つ郷土をうたった次の一詩がある。

秋風蕭颯渡刀川<sup>（トネ）</sup>

欲去尚看両野天

新雁不知孤客意

声々鳴到赤峰辺

最晩年の一八八九年秋も深く、同志社大学設立募金のための募金行脚中、前橋で病に倒れ、志を果たし得なかった時の七言絶句である。「孤客」という表現に見るように、彼の目に最後にうつった両毛の秋景は淋しかったように思えてくる。新島はこのあと終焉の地大磯に移る。

しかしこう書いても新島がその故郷を愛することがなかったということではない。同志社創立後まだ日の浅い一八七八年の三月の「記行」（全集第5巻「日記・紀行編」所収）によれば、新島は門下の俊秀海老名（のち弾正）を伴つて安中を訪れ、ここに「公会」を設立する。その折のスケジュールの慌しさを見てただ驚くばかりである。

三月二八日未明（四時）に東京を郵便馬車で発ち、午後三時高崎着、直ちに人力車を雇つて安中に到着（現在バスで約三〇分の道程である）、夜、湯浅治郎の設立した「便覧舎」で集会。翌二九日と翌々三〇日は林家で説教集会、三十一日は



新島家旧宅(安中市)

ただ一日、四月二日の「記行」には

海老名と共に集会、夜七時半より「公会設立」の式を行ない、三〇名の受洗者を待っている。四月一日は後閑に赴き血縁に連なる人々のトラブルの和解や、義理甥公義の身分のことについて関係者と折衝したり、「ヂヂ」の飲酒喫煙をやめさせるよう説得を試みている。風土の美を顧みると間もなく翌々日には高崎に出て再び郵便馬車に身を委ねている。

二日、中後閑村ノ上原春朔君(注、受洗者)之宅ニ至リ、其ヨリ一里モ山ノ奥ニ行、フオッスル<sup>モ</sup>ノ有ル所ニ至リ、スペースメンヲ取レリ(『全集』第5巻、八四頁参照)

とある。地質学や鉱物学を学んだ新島らしい郷土への関わり的一面である。「記行」に記されている場所は、現在安中市笹原にある化石床のことであろう。安中のバスターミナルからバスで一五分の道程にある。しかしどう見ても新島は内村ほど自然美によってインスピレーションを受けるタイプではなかったとは言えよう。たしかに最晩年には「寒

梅賦」のように人々に親しまれる漢詩を残してはいるけれども。

新島と内村と、上州の生んだ代表的人物であるが両者の個性は著しく相異する。しかも両者に共通するものがあるとするれば、郷土史家がよく指摘する上州人気質、感激性と激情性であろう。神戸のマイルドな土地柄をはなれて此の地に移り住んだ私には、このことがようやく理解できるようになった。

上州の山は美しい。しかもその山容のたたずまいの変化の妙は、山をもつて人物に擬することを詩人にはさせるらしい。蘆花の『自然と人生』には「上州の山」と題した一文がある。

或いは奇峭、或いは雄偉、根は地に、頭は天に、堂々として立つて居る。果しない桑原の道に鑿き果てて、其となく眼を上げると、此等の山々が常に泰然として頭を擡げて居る。日常生活の齷齪<sup>くさくさ</sup>に立ち雑つて、然も心は挺然として無窮の天に向う偉大の人物は、実に斯くの如くあるであろう。自分は上州に行く毎に、山が斯く囁く様に覚ゆるのである。

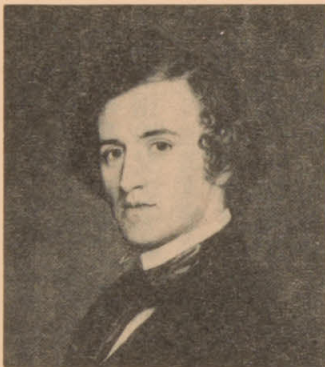
私は今、蘆花の見たのと同じ眺望を前にして、あの長く裾をひく赤城の山を新島裏に、峻険奇峭の妙義の山に内村鑑三を擬するといひひそかな楽しみを覚え始めている。



## 新島先生の恩人への墓参(下)

井上勝也

(六) Prof. Edward A. Park 一八七〇年七月アーモスト大学を卒業した新島は畢生の事業——キリスト教を我国に宣教するために、キリスト教神学を研究する目的で同年九月アンドーヴァー神学校に入学した。それはニューイングランド神学の大家 Park 教授に指導を仰ぐためでもあった。カルヴァン主義神学を基調としたこの神学は南北戦争後は衰退期に入り、Park 教授は同神学の純粹性、正統性を固守していた最後の神学者であった。新島の思想の中核ともいえる自由及び良心の概念も、明治一三年の自責の杖事件に見られる彼の行為も、ニューイングランド神学における贖罪論、統治説と密接な関係がある。新島時代はもとより、それ以後も長くアメリカン・ボードの本部があった建物はボストンの Beacon Street 一四番地にあり、現在はコンクリート・ライブラリーになっている。当ライブラリーの読書室に入って驚くことは、マントルピース上の向って左側に新島の恩人 Hardy の大理石の胸像が、右側に Park 博士の胸像が置かれていることである。二人ともボードに大きな貢献をしたためであろう。Park 教授の墓はフィリップス・アカデミーのキャンパスの北東隅にあるアカデミー及びアンドーヴァー神学校関係者の共同墓地にあった。勿論彼はコンクリート・ライブラリーである。



若き日のハーディー

(七) Mr. and Mrs. Hardy 新島の最大の恩人 Hardy はアメリカ史の立志伝中の人である。彼は一八一五年マサチューセッツ州ケープコッドのチャタムに生まれた。父親は村で万屋 (General store) を営んでいた。一六歳の時、ボストンに出て店員になり、一時フィリップス・アカデミーに籍を置いたが、病気で中退した。一九歳の彼は牧師志望の道を断念し、再びボストンに出て船会社の代理店や沿岸貿易に着手、二二歳で地中海貿易に手を広げた。三〇歳で既に地中海、南米、中国、東インドに貿易船を就航させている。一八四八年、三三歳で協同経営者と別れ、Alpheus Hardy & Co. を設立、独立した。彼は多忙な貿易業のかたわら、選ばれて極めて多くの責任ある役職についている。その一つは船員達にキリストの福音を宣べ伝えることを目的として創設された Boston Seaman's Friend Society の会長で、三四歳の時から二一一年間も続けている。一八六五年九月、ボストンの Purchase Street にあつた Seaman's Home で、

Hardy 夫妻の求めに応じて新島がいわゆる密航理由書を書いた時、Hardy は当 Society の責任者であつた。一八五四年、彼は Granite Bank 後年の Second National Bank の会長を三年勤め、五七年のパニックも巧みに切



り抜けている。一八五五年にはボストンに穀物取引所が開設されたが、四〇歳の彼は初代会長を引き受けた。同年彼はフィリップス・アカデミー、アンドーヴアー神学校及びアーモスト大学の理事を引き受け、前二者については亡くなる二年前の一八八五年まで三〇年間、後者については一八七七年まで二二年間その地位にあった。アーモスト大学の第三代総長 E. Hitchcock は彼の回想記の中で、Hardy の有能さについて次のように記している。

彼は未だ一八五五年以来の理事であるが、彼の奉仕は極めて価値があり、有効であるので、我々は、彼の大学との結びつきが長く続くことを望んでやまない。(Reminiscences of Amherst College, 1863, p. 14)

Hardy がアメリカン・ボードの役員に就任するのは一八五七年からで、法人及び財務委員会のメンバーに、さらに一八七三年からは財務委員会の議長に就任、亡くなる前年の一八八六年までこの地位にあった。彼は他にも多くの名譽職——しかしそれは閑職ではなく、困難な事業を遂行するための牽引的役割——を引き受け、見事に職責を果たしている。

Hardy 夫妻には四人の息子がいた。一八五七年、同郷で先輩である Joshua Sears が亡くなるや、二歳になる彼の一人息子を引き取り、また一五〇万ドルに及ぶ彼の遺産の管理も委ねられた。そして一八六五年、夫妻にとって六番

目の息子として新島襄が迎え入れられたのである。以後一八八七年八月七日、Hardy は敗血症のために亡くなるまでの二二年間、新島にとつて「日本伝道上に無比の良友、又予が米国の父とも称せし人」(アメリカの慈父アルフィーアス・ハーディー氏を記念して「新島研究」No. 4, p. 14)であつた。

私は、言葉の正しい意味におけるピューリタンとしての生涯を貫いた新島の最大の恩人 Hardy 夫妻に感謝の意を表したく思い、滞米中、夫妻の墓地を探し廻つた。ボストンにある殆どの共同墓地の管理事務所に手紙を出したが、見つからなかつた。あと二ヵ月後に帰国のせまつた或る日、アーモスト大学の図書館員に窮状を打ち明けると、彼女は



ハーディー家の墓

Hardy の死亡年月日と場所が判っているのであれば、ボストン市役所の戸籍課死亡係に手紙を出すようアドヴァイスしてくれた。百年前に亡くなった人の記録が残っているのだらうかという一抹の不安を抱きながら、藁にもすがる気持で早速手紙を出した。数日経つて戸籍課から Hardy の死亡証書を送るから二ドル送金するようにとの連絡を受



け即刻小切手を送った。鶴首して待つこと五日、立派な死亡証書が送られてきた。見ると埋葬場所まで書かれているではないか。翌日ボストンに飛んだ。それはハーヴァード大学のあるケンブリッジの極めて大きな共同墓地 Mt. Auburn Cemetery であった。管理事務所で墓地の見取図に印をつけてもらい、一直線に Hardy 家の墓地に赴いた。大雪の後で未だ墓石の半分は埋もれていた。Hardy 家の一三人が葬られており、Hardy の両親と並んで Hardy 夫妻の小さな墓石（高さ七〇センチ・幅四〇センチぐらい）が建っていた。Hardy の墓石には Alpheus Hardy の姓名と生年没年が刻まれているだけであった。最盛期には世界の海に一七隻の貿易船を就航させ、南北戦争時に共和党員としてマサチューセッツ州の上院議員を勤め、ボストン市長の指名をも受けたことのある Hardy の墓石は、コングリゲーションリストにふさわしい簡素なものであった。（同志社大学文学部教授）

## A・S・ハーディーのことなど

### オーテス・ケリー

新島先生に関する本はいろいろあるが、それらの中に英語で書かれたものが二冊ある。この二冊は、新島が亡くなった年とその翌年に出版されたもので、新島に関する本の中で一番早いものではないかと思う。新島が亡くなった年

に出たのは、新島の同僚であった J・D・デイヴィスが書いたもので、その序文を見ると、一八九〇年二月、すなわち新島が亡くなった翌月の日付になっていて、デイヴィスは同僚の死を惜しむ気持ちから、早速その本にとりかかったものと思われる。

もう一冊は、先ほど『新島襄全集』の第10巻として、やつとフルに忠実な翻訳が北垣宗治先生によってなされ出版された、A・S・ハーディーによって書かれたものである。手に取ればすぐわかるように、これは題からしても『新島襄の生涯と手紙』となっていて、出来るだけ新島自身をして新島を語らしめるという表現方法がとられている。

今回配本の第6巻『英文書簡編』には、新島が英語で書きはじめた初期の頃の、まだ英語が幼稚な手紙から、複雑なキリスト教の伝道の政策に関するものまで、三百余通の書簡が収載されている。これらのうち、四分の一以上がハーディーの前述の本に収録されているのだが、そのオリジナルは残念ながら殆ど現存しないようである。つまり、ハーディー家にあてた相当多量の新島の手紙は A・S・ハーディーによっていくらか手が加えられて、原本のまま印刷工場に入れられたと解釈するより仕方がない。私も三〇余年にわたって、その原本を日米両国にわたって探してきたのだが、残念ながらいまだに見出されていない。

A・S・ハーディーは、新島より少し年下で、兄弟あにがとのような関係にあったと思われる。ボストンに着いた新島が、ハーディー家の世話によってアンドーヴァーに行くのは、

ちようど南北戦争が終結し、リンカーン大統領が暗殺された年だった。A・S・ハーディーもアーモスト大学に一年間在学するのだが、軍職にあこがれたせいかウエスト・ポイント陸軍士官学校に移っている。そのため、フィリップス・アカデミーにしろ、アーモスト大学にしろ、新島とは重ならないのである。彼はウエスト・ポイントを優秀な成績で卒業しながら、間もなく軍の生活に飽き、ダートマス大学の教授になって二〇年ばかり過ごしたが、どういうわけか、その在職中、一八七三年にアーモスト大学からドクター・オブ・フィロソフィの学位を受けている。その頃のアーモスト大学はPh・Dを出すことはあつたが、A・S・ハーディーは論文を書いて提出するといったことを経ていないはずだ。また、こうした学位を出したのは、アーモスト大学としては一九世紀に限ったことで、現在の名誉博士号に匹敵するものと考えてよからう。

こうした青年期に新島と知りあつたA・S・ハーディーだったが、ちようど岩倉使節を手伝つたりした新島のことをちよいちよい聞かされ、また、ボストンの中心地にあつた4 Joy Streetへの出入りが、お互いに重なつたと考えたい。大学教授をやめ、文筆活動から外交官の道に入るハーディーであつたが、二五年近くも新島のキャリアを見守つて来た彼は、新島の生涯を出来るだけ新島本人に語らせるよう、家に残されていた多くの手紙を読んでその抜粋を著書に掲げたのである。残念なのは、そのオリジナルが残っていないことである。

(同志社大学文学部教授)

## 《編集余録》

第6巻『英文書簡編』をようやくお届けできることになりました。編集を担当したオーテス・ケリー委員が、当「月報」に特に一文を寄せて記していますように、ケリー教授は英文書簡など新島資料の収集に、すでに三〇年を費しています。その間に種々の資料の発掘があつたのはいうまでもありませんが、A・S・ハーディーが*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* (1891) に収録している新島書簡(そのまゝの形で第6巻に再録)の原本は、いまだに発見できず、それがケリー教授の最大の心残りになっています。

\*

先にA・S・ハーディーの右の著書を、全集第10巻『新島襄の生涯と手紙』として完訳した北垣宗治委員は、この第6巻『英文書簡編』では解題と索引でケリー委員に協力しました。そして、今年も、新島襄ゆかりのボストンやアーモストで夏期休暇を資料探訪に専念するため出発しました。新島周辺の資料は日本語のものも含めて、ハーヴァード大学の図書館などに、かえつて豊富に収蔵されているものがあるとのことで、蓄積の差を思わずにいられます。

\*

次回配本は、今秋、第3巻『書簡編Ⅰ』を予定しております。続いて、第4巻『書簡編Ⅱ』および第7巻『英文日記・紀行編』を一九八五年度内にぜひ刊行いたしたく、目下その作業を進めております。

(河野仁昭)



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

VI 報 月

第 3 卷  
1987 年 9 月

## 目次

新島襄とL・L・ジェーンズ―F・G・ノートヘルファー	1
『蘆花日記』における新島襄	3
『七一雑報』の新島襄と女子教育	6
編集余録	8
杉井六郎	

同朋舎出版

京都市下京区  
中堂寺鍵田町2

## 新島襄とL・L・ジェーンズ

F・G・ノートヘルファー

一八七六年二月はじめ、熊本のジェーンズは京都の新島襄とデイヴィスに宛てた書簡で次のように述べている。

あなたは、恐らく私のことを全く御存知ないと思います。私は、四年半ばかり前から、ここ熊本に建てられた学校の責任者として力を尽してきました。私のもう一つの仕事は、四年前からキリスト教について話すことができるようになり、生徒たちに宗教上の薫陶をすることでした。事実、私のすべての仕事は、キリストの王国のために働くように向けられていました。そして、私に委託された生徒たちの仕合わせを願ひ、またその生徒たちや学校を通じて広く日本の社会に感化をもたらしことを念じておりました。そして、わたしの働きに神の霊が宿り、かつ力づくよく働いていることを体得しました。その証拠や特

性や詳細な点については、やがてあなたにもつまびらかにされることと存じます。

学校は当地熊本、そして江戸でも評判をとっています。四カ年の課程に、力のおよぶ限り教育を徹底するように努力しました。最初の学級は去年夏すでに卒業し、次の学級は来る七月に卒業します。昨年度の卒業学級の数名と、本年七月卒業の学級のものたちは、敬虔で真摯な信仰をもったキリスト者で、すでに、しばしば、その生涯をキリストと貧しい人びとに捧げることを公然と表明しました。彼らは神恩のもとに、救霊の業をすすめるためには、何が最善であるかを求めて、私に身をゆだねております。生徒たちの資質はきわめてすぐれており、最高と言えないまでも、今日の日本で、これ以上のものがあるかは疑わしいと思います。

「同志社」は彼等を必要としますか、また、「同志社」は主の御業のために彼等をよりよく準備させることが出来ますか。

「同志社」からの返事ははっきりとイエスであった。一八七六年の秋までにジェーンズが育てたクリスチャンの大部分は京都の学校に入った。大阪英語学校でしばらくの間教鞭をとったジェーンズもまた、新島と会ってお互いに知り合う豊かな機会に恵まれた。実際、二人は日本に一つの教派にとらわれないキリスト教主義のカレッジを設立するという同じヴィジョンを共にしていたことを知った。そのような願いを新島はアーモスト時代からもっていた。新島もデイヴィスもジェーンズがそのような大学の責任者となるのにふさわしい人物であると思った。そうすることによって、宣教師たちは、カレッジを卒業した神学生たちの神学教育に一層力を注ぐことが出来るであろうと思った。ジェーンズはのちに、同志社カレッジについての構想をまとめ、アメリカン・ボードの理事会のために作成したが、新島やデイヴィスばかりでなく、ジェーンズにとって大きな失望であり悲劇だったのは、彼が再び日本に帰って来て、アメリカン・ボードと結びついてカレッジのために働くことが実現しなかったということである。

アメリカ帰国後のジェーンズを取り巻く論議は、明らかに宣教師と同志社に対する彼の態度をかえた。しかし、注目すべきことは、後年のジェーンズのデイヴィスを含めて多くの宣教師たちに対する冷淡さは決して新島には向けられなかったということである。ジェーンズは常にキリスト教と社会改革との緊密な連関に基づくヴィジョンを共にする人物として新島に対する尊敬を保ち続けた。それ以上に、

また、次のことをつけ加えねばならない。それは、新島もジェーンズに対して同志社の設立と発展に対する彼の貢献に感謝を抱き続けたことを。

ジェーンズと新島を結びつける一つの事件は、一八七六年の秋、多くの熊本バンドの生徒たちが「同志社」で経験した最初の不平不満であった。それは以前からいる生徒の学力、不規律、さらに貧弱な授業であり、失望した熊本バンドは京都を去って東京の開成学校に入ることを申し出た。大阪で彼のもとに送られた代表から生徒たちのこの不満を聞いたジェーンズは、東京に出るよりはむしろ、京都の学校を改善するために努力すべきであると忠告した。すなわち、彼らが自らを「同志社」の創立者であると思うようにすすめ、若し学校に不満があるならば、新しいカリキュラムを作り、自らの寮の規則を作成し、学生規律をそだてることこそが自らの義務であることを強く主張した。そして、若し、こうした学校改良の叫びが受け入れられないとき、はじめて東京に行くことを考えるべきであると。

熊本の生徒たちは、ジェーンズの忠告を受け入れ苦情の数を書きつらね、覚書という形式で新島とデイヴィスに提出した。彼等を驚かせたのは、新島が心から彼らの申し入れを認め、ただちに、その改善を進めたことであった。数週間の内に熊本の生徒たちは、「同志社」を変えはじめ、熊本で行われていた多くの規律と秩序を「同志社」に再現することに成功した。それ故に、初期「同志社」は多分に範を熊本洋学校にとるに至った。その事を覚えて、新島はジ



エーゼンズが同志社を救ったと述べたのだった。

ジェーンズと新島は、ともにキリスト教が宗教的な価値観に根ざして倫理的な基盤を形成するものであるという共通の考えをもっていた。それは、キリスト教は、人間や社会を変革するという社会的な働きに力点をもったキリスト教理解であり、当時の明治維新の時代的要請に応じたものであったが、二人の考え方は、他の多くの人びとによって支持されなかった。すなわち、一八九〇年代にジェーンズが日本そして同志社に來た時には、いままでもり以上にキリスト教の本質は「行動」「努力」「思考」「先見」「勇氣」「科学」「鋤とつるはし」「タイル」「セメント」「そして清らかな水」であり、それらは、彼自身の「祈り」「賛美」そして「説教」であると主張した。そこでは、ジェーンズは「同志社を救う」人物であるよりはむしろ、その破壊をもたらす男と考えられるに至った。その時、新島はすでにいなかった。しかし、若し新島が、この一八九三年のジェーンズの講演を聞いたら、どのような反応を示しただろうか。興味深い思いがする。

さて、ジェーンズと新島が深いつながりを持ったという証拠、少なくともその事実を示す書簡は現存しないが、二人が離れていてもお互いに尊敬し合っていたことは明らかである。二人は人柄において相違し、しかし理想において一致していた。この二人は同志社が大学となるのに重要な責任を果たした人たちであった。

(UCLAロサンゼルス校歴史学教授)

## 『蘆花日記』における新島襄

笠原芳光

徳富蘆花は同志社の生んだ最大の文学者である。ということは同志社は文学に関しては、それほどすぐれた人物を出していないという意味でもある。

蘆花は当時、すべての著書が短期間に何万部と売れるベストセラー作家であり、いくつかの長篇小説もある。だが、すぐれた小説がない。強いていえば『思出の記』だろう。むしろ『自然と人生』や『みづのたはこと』のようなエッセイのほうがよいのではないか。

むしろ蘆花は人間の矛盾を精一杯生きた自由人であった。その自由には権威を怖れぬ勇氣と我儘勝手とが含まれている。最近、筑摩書房から刊行された『蘆花日記』全七巻は蘆花の赤裸の姿を示す日記であり、今日だからこそ伏字なしで公開されたといえよう。あるいは、これが蘆花の最大の文学作品であるかも知れない。

大正三年五月五日の結婚記念日から始められ、ほとんど毎日、書かれて、外遊を控えた大正七年の大晦日に至る膨大な、この『蘆花日記』のなかから、新島襄に関する記述をあげてみよう。最初の言及は、大正三年十月十三日である。文中、蘆花はつねに「新嶋」と表記する。

新嶋のお八重さんに対する憎悪は成人した久栄に対する

憎悪だ。久栄の眞の母は寧ろお八重さんだ。それから推して行けば、お八重さんに愛想をつかした新嶋先生が「久栄はよくない女です」と余に云はれたのには千万無量の意味がある。従つて先生が余を愛してくれたことになる。余が新嶋先生に頭を下げなかつたに關せず如何しても先生の眼を疑ふことが出来なかつたのは、其事を余の靈が知つて居たからである。余は今こそ新嶋先生の墓にも久栄の墓にも自由な心を以て参ることが出来る。嬉しい事だ。

小説『黒い眼と茶色の目』の執筆を始めるに當つて書かれた部分である。「お八重さん」が新島の妻、「久栄」が新島の妻の兄山本覚馬の娘で、蘆花の初恋の相手、そして「黒い眼」が新島の、「茶色の目」が久栄のそれを指すことは周知であらう。蘆花は十九歳で失恋し、二十五歳で死別した久栄を忘れることができず、原田愛子との結婚後も長く夫婦間の言い争いの因となつていた。それを清算するような思いで書き始めたのが、この小説である。

蘆花は久栄を忘れられない一方で妻愛子を愛しており、愛子と結婚できたのは、新島が姪ではあるがコケティッシュな性格の久栄を「よくない女」といつてくれたのが一因だと、新島に感謝しているのである。

翌十四日の日記にも「新嶋先生の魂は誰に入るのだ。兄か、余か。はた誰か。先生は妻を得ずして死んだ。先生は其妻の後身となる筈の久栄を余に与ふことを拒んだ。余

は久栄を得ずして、妻を得た。新嶋先生の魂は畢竟余に入らねばならぬ」とある。「先生は妻を得ずして死んだ」という部分はわかりにくいだが、新島との一体化をいうほどのひじょうな敬意が窺える。

だが蘆花は矛盾に満ちた人間である。妻愛子を熱愛しながら、すさまじい夫婦喧嘩をやり、二十年以上も前に亡くなった初恋の女性のこと、夫婦とも執念深くいさかいをする様子が、この日記の随所に記されている。その矛盾した感情の起伏は新島裏に対しても發揮される。

四箇月後の大正四年一月二十三日には「新嶋さんの第廿五回忌だが、有体に白状すれば、何の感情も湧かぬ。新嶋さんは余の知己でない。『黒い眼と茶色の目』で、新嶋さんに負ふだけの債務は払つた。新嶋さんには色々不満があるやうだ。ゆるく思案して見やう」とあり、翌二十四日には『黒い眼と茶色の目』の読後感を知らせてきた同志社の級友で、妻愛子に洗礼を授けた安中教会牧師の柏木義円の好意的な手紙に、かえつて腹を立てる。

Class mate から一人も手紙をよこさぬと云ふて居る処へ、矢張柏木は第一番によこした。然し何処ぞに後輩扱ひは虫が好かぬ。新嶋先生の感化でもないのだ。平民主義、平和主義もウソぞ。人を型に入れるやつは皆敵だ。況んや細君と連名にして手紙をよこすなんか。洗礼を受けさせた余も馬鹿だが、何時までも牧師氣どりの柏木も大馬鹿だ。余は向後断然彼を勿ねる。



柏木が、主宰する新聞『上毛教界月報』を教会員である徳富愛子に送るのは当然であるが、その宛名を見て、一種の嫉妬を覚えるのか、蘆花は自分が受取ると妻には渡さずに読んだり読まずに捨てたりする。その余波が師の新島に及んで、いわば「袈裟が憎けりや坊主も憎い」とでもいうのか、新島にまで喰ってかかる始末である。このような愛憎のアンビヴァレンスは、この概念を提唱した心理学者のE・フロイダーにいわせると精神分裂症の心性の一つだというから、蘆花には多少その傾向があったのかも知れぬ。

大正四年八月二十二日の日記には、「昨夜は白衣の新嶋さんのテーブルに凭つて居る前に余が出るに、足が脚気の腫れて重たい夢を見た」とあり、新島のことを氣にかけている深層心理が窺える。そして同年九月二十二日には「小生儀思ふ所あり 自今同志社校友会々員たることを辞し 同志社大学寄附金の契約は之を中止す 右御通知まで」という手紙を同志社々長、校友会々長宛に出す。社長は原田助であったが、「原田助の名を書かぬは、原田の名を書くすらいやなからだ」という。

そして同年十二月二十八日には校友会退会のことを妻と語りあったとして「人が居ない時だったから新嶋さんだったのでしやうが、あなたは初から其不足を感じてお出なすったのでしやう」「新嶋さんには無理がある、自然でない。彼人の強味で弱味だ。然し同志社の関係もやっときれた。嬉しい」などという妻の言葉を記している。愛子にとって

は恋敵ともいべき久栄であり、その背後の新島や同志社も好ましくないというのだろう。これは蘆花の感性が愛子に感染している状態であり、似たもの夫婦という姿である。蘆花は毎年、一月二十三日には新島襄を思いだす。大正六年同日の日記に「新嶋さんの命日だ。余は新嶋さんに悪意はないが、感謝も感激もない」として、妻と話しあい、新島は「余を子供に思ひ過ぎた事、克己節制過ぎて自然を新嶋さんが失ふた事、などに二人の考が一致した」という。だが大正七年の一月二十三日には、また思いが新たになる。

今日は新嶋さんの命日だ。廿九回忌だ。早いものだ。其筈さ、今年は俺達夫婦のもう銀婚だもの。矢張静かな心で想ふと、新嶋さんは恩人だ。新嶋さんのやり方には含糊で手ぬるく不徹底な点があつて、わが全幅の感謝を喚起し得ぬが、兎に角久栄から俺を引離したは、新嶋さんの力が多い。久栄は俺を殺したに違ひない。即ち新嶋さんは俺の命の恩人と云ふことになる。

そして、その徴として安中教会に寄附を申出る。同年三月五日の日記によると「恩師新嶋襄先生の故郷安中基督教会堂新築費用の中に、軽少ながら金参百円を、感謝と悦喜を以て捧ぐ」として、夫妻連名で振替を送った。さらに「新嶋先生も喜ぶだらう。柏木も大慶に違ひない」とある。そのあと三月十五日には、「横井小楠、新嶋襄、ゼーンス、同志社、父母、兄姉一切のものが余を生む為に用ゐられて居

る。海老名、金森、其他一切が余の為に道ならしをして居る」と書く。

なんという愛憎の転変であらう。その時々には本気で人を憎み、人を愛する。それが蘆花の人生であつた。こんなおもしろい日記は類を見ない。性格は違ふが永井荷風の『断腸亭日乗』と双壁をなすといえよう。やはり徳富蘆花は同志社の生んだ最大の文学者である。

(京都精華大学学長)

## 『七一雑報』の新島襄と女子教育

宮澤 正典

この全集には新島襄の名で出た広告がみな収録されるのかどうか。明治一年六月の「同志社女学校広告」はすでに第1巻に採録されているが、同年八月から九月にかけて『七一雑報』に数回にわたつて同志社々長新島襄の名で載つた「同志社広告・同志社女学校広告」はまだ拾われていないので、あるいは同紙上の次の「広告」もここで掲げておいてもよいかも知れない。

小生是レ迄何時トモナク諸君ノ御来訪ニ応ジ来候処多年ノ脳痛近時殊ニ甚敷覚エ候ニ付不得止爾来毎日午後第三時ヨリ五時迄ノ時ニ限り在宅ナレバ御面会申候間此段兼テ諸賢ニ御通知申上置候也

京都 新島襄

(『七一雑報』明治16年2月9日、同23日)

新島は前年にはハーディーにあてた手紙に、頭痛のため読むことも書くこともできないと訴え、周囲からは休養を勧められていたが、明治一六年の新島の健康状態を裏付ける記述は次のものがすぐ見付かる。徳富猪一郎にあてた年賀状に「小生ニも乍多病加年仕、臥櫪之志決不消御休神被下度奉希候」と付記したもの。二月九日の日誌に「本日ハ脳病宜シカラサレトモ、無理ニ出校シタリシガ」「授業中何ニカ脳中ニ混雜ヲ覚ヘ」て生徒の質問に思いちがいを答えたらしいこと。また三月二日に「病院ニ行キ、金月水ノ三日ニエレキヲ身体ニカケル事ヲ頼ム」(『全集』第5巻)とあることなどである。周知のように、新島は自らに厳しく課した激務のなかにあつて、病軀をおしてなお右のような広告をする配慮には感銘をうける。

これが掲載された『七一雑報』は明治八年同志社英学校創立から約一ヵ月おくれて神戸で創刊されたキリスト教週刊紙であるが、いずれもアメリカン・ボードあつてのスタートであつた。そういう点から考えれば、同志社誕生の次第が記録されていてもよいと思うがほとんどない。神戸女学院のそれはかなり詳細であり、その後も折りおりに入学が勧説されるおもむきの記事があるのは地の利をえていたからだろうか。同志社記事の初出はおくれて明治一〇年秋、きわめて簡潔に紹介されたにすぎない。それによると「同志社英学校は米国の諸兄姉と新島氏との信仰と愛の力によ



り」西京に創立されたこと。これまでに入塾した生徒総数一一一、退校三〇、在校生八一。退校の内訳を「事故ありて出しもの一七人、耶穌教を嫌いて出し者八人、道より迷ひ出しもの五人」。在校生中バプテスマを受けたもの四四人、未だ受けてないもの二七人を紹介し、追いおい盛大となるのにもなつて手狭なので入塾寮、書籍館、講堂が新築されたことなどを伝えている(明治10年10月26日)。しかして以後の記事は日を追つて増加し、同志社が襲蔵する資料以上によく當時を物語っている場合がある。

たとえば校内で「英和両語の演説会」に続いて「英人セキス・ピール著述書中よりウエニス府商人の話を読み出し日本語の対話を催ふしたりしが満堂の聴客或は泣き或ひは笑ひ其実を見るの思ひあらしめたり」(明治13年12月24日)などと當時の生きた姿を伝えて彷彿とさせるものがある。新島は一〇月一日から約二カ月にわたつて伝道旅行に出かけていて帰洛の日を確定できないが、この日が「第六学年第一期の試験」最終日であつたことを考えると、この行事に間に合うように帰校していたとみてよいのではないだろうか。



6 卷30号(明14.7.29)

『七一雑報』は明治一年一月開校の梅花女学校については、記事に加えて当日の成瀬仁蔵の長文の祝辞も掲載している(明治11年1月25日)。習一二年土佐堀に校舎を新築

し開業式をおこなつたことも詳しく報じている。新島裏はこれに出席し、澤山保羅らとともに「女学校設立と女子教育の大切なことを演舌」し、式は新島の祝禱をもつて終了した(明治12年11月14日)。「全集」第1巻によれば、新島は澤山没後の明治二年にも梅花に行き、澤山らの精神を擁護して女子教育の意味について語っている。

さて、その後『七一雑報』における同志社関係記事に同志社在學生、卒業者らの寄せた論説なども含めればかなりのウエイトを占めたと言つてよい。ところが同志社女学校については同志社の男学校記事に附随的に触れられる程度であるのが通常で、神戸女学院、梅花が独立して扱われるのに比べると、いささか影が薄い。じつは男学校とのこと関係はいまもひきずつてきている感じがある。

しかし、少ない記事のなかから次のようなニュースを捜し出すと、創立間もない新島の女学校の息吹が伝わってくる。安中教会の近況を伝える記事中に「殊に喜ぶべきは愛姉なる浅田江場の両女子は自ら学識なきを憂へ今より同志社の女学校に入り勉強せんと欲し今回市原氏と同伴して西京へ赴くことに決定せり」(明治11年9月20日)とある。また高槻の近況では、二児の母が同志社入学のため上洛したこと伝えてある。彼女は「去る頃西京同志社の規則書と同地に新築なりし女学校の学則を読みおはつて心の中に思ふやう婦女に生れて学問なきは実に残念至極なり何卒女学校に入て勉強したきもの」と決意し、ついに夫の協力をえて、「上原氏が西京に帰らる、砌同地より入校のため同道せし



者男一人婦人二人娘一人なり」のひとりに加わったのであった(同前)。彼女の読んだ学則は時期からみてききの『七一雑報』の広告を介したものでなかったか。ちなみに浅田タケは安中で新島より受洗し、のち内村鑑三が最初に結婚した女性であり、江場かねは四年後に市原盛宏の夫人となった人である。

『七一雑報』は続いて、彼女らが入学したであろう同年秋の女学校が「追々盛大に趣く様子にて現今生徒は二〇名なりといふ」(明治11年10月4日)と伝えているから、この中に右の五名を含んでいたと推定すれば、同志社女学校がどういふ雰囲気をつくっていたかをうかがうことができる。

さて、新島襄と女子教育についてだが、かれが心血を注いだ第一義的な教育機関は英学校であり、次は大学設立であつたことから、女子教育は副次的であつたとみざるをえない。しかし、ないがしろにしていると考えてはいなかったことは間違いない。しかもそれは狭く同志社女学校ではなく、澤山、成瀬らの学校にも同志的に意を注いでいたことは明らかである。期せずして岡本道雄氏から、新島襄と神戸女学院の深いえにしをお教えいただいたが(月報II)、梅花女学校についてもそれは言える。原田助と神戸女学院の關係は、澤山を継いで梅花校長を兼任した大阪教会牧師宮川経輝の場合と多くの点で共通しており、その關係は原田の場合よりはるか長期におよんだ。また宮川は大阪に赴任する前、英学校卒業と同時に新島に推されて同志社女学校の初代教頭をつとめるといふ縁ももっていた。ちなみにかれ

れの卒業論文は「女子教育論」であつた。宮川のあとの校長も、成瀬を除いて、三宅荒毅、長田時行、伊庭菊次郎らはみな同志社の出身者であつた。明治二二年に宮川が梅花で創刊した『梅花余香』を發展的に解消して、翌年に同志社、梅花、神戸英和、岡山山陽の四女学校を中心とする『つば美』(その後津保美)『つばみ』が大阪の福音舎内女文会から刊行され、明治二五年までに二四号を数えた。これは姉妹校の脩交、文学の奨励、女学の開進を目的にうたつていた。これらをなさせたのも、これらの学校間で昭和初期にいたるまで互いの学校の發展を祈りあつたという伝統をもつていたことも、深いところで新島襄を介した連帯があつたと言えるかも知れないのである。

(同志社女子大学教授)

### △編集余録△

ようやく第3巻『書簡編I』をお手元にお届けできることになりました。遷延の永きにわたつてご迷惑をかけたことをお詫び申し上げます。

『書簡編I』の編成は初期書簡から年月の順を追つてならべ明治二十一年末までを収載しました。紙幅の都合で本巻は注解のみを掲げ、解題は第4巻『書簡編II』に合せて収載いたします。本巻の表紙の見返し、前は在米中、弟の双六宛書簡の訓戒を与える部分、後は徳富猪一郎に「同志社大学設立の旨意」執筆を依頼するマテリアルである。(杉井六郎)



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

Ⅶ 報 月  
第 4 卷  
1989年 8 月

## 目次

「新島襄」について思うこと	大内三郎	1
新島襄との出会い	山下忠規	3
新島襄と植村正久	高橋昌郎	5
編集余録	杉井六郎	7

同朋舎出版

京都市下京区  
中堂寺鍵田町2

## 「新島襄」について思うこと

大内三郎

人物を考察・論議するさい、長い間の習練の為か歴史的特に日本キリスト教の上にのせてする仕方が慣習化になっている。そこで思い当るのは、この人物は日本キリスト教史よりどうしても外せぬ人物とわかっていながら、実際のせてみると、どういうものかもう一つばつとしない、もしくはどうもその一面しか浮んでこない場合がある。自分の不手際を計算に入れながら複雑な気持ちである。その顕著な例が「新島襄」である。ここで私の日本キリスト教史について一言しておく必要がある。幕末・明治初期日本にキリスト教（プロテスタンティズム）が移入されたが、それが日本にいかにか主体的に正しくその本質において受けとめられたか、歴史的にそれを問い明らかにする、素朴な言い分だが、これが日本キリスト教史であると考えている。具体的に「福音」と「教会」を日本の初代キリスト教徒は追求

したかである。その点からして、機会あつて植村正久・内村鑑三とともに新島襄を問題にしたい、こういったことがある。「内村・植村は何はともあれキリスト教の本質ともいえる福音を扱えた。そして扱えたが故に彼等はキリスト教を外国ミッシンから解放せねばならぬとした。福音の把握と外国ミッシンからの解放との間には、彼等のナシヨナリズムが介在していることは認めねばならないが、しかしそこにはそれを越えて福音自体の理解また神学の必然性があつた」ところが、「新島の福音の理解を多少構造化をもつて書かれた文献は彼から見出せない。このことはもちろん新島が福音を理解しなかつたことを意味しない」と新島にたいする不満を呈したことがある（講談社版『現代日本文学全集』14「内村鑑三集―附キリスト教文学」一九六四）。その後、新島について必ずしも割りきつた気持ちにもなれず、中途半端な思いでいた。

ところが偶々日本キリスト教教育史に参画する機会をあたえられ、自分なりにこれを組み立ててみた。日本キリスト教教育史が一つの独立した学問の世界で、私は門外漢で

あることは重々自覚しているつもりであるし、新島研究に没頭されている先学も多いので、もう言いふるされたことと思うが、新島を日本キリスト教教育史にのせてみたら、やはりあつと思つた。俄然彼は光彩を見事に放ってくる。それは断然他を圧しているといつて過言でない。彼の教育についての構想は大別して二つになる。

(1) 「今日に於て我日本に真正の教育を布き、以て治国の大本を樹立し、以て人智を開発し、以て真正の文化を興隆せんと欲せば、宜しく欧米文化の大本たる教育に力を用いざる可らず」(同志社設立の始末)一八八三。明治当初これだけの教育経緯をぶつけた書は、これは新島が単身意を決して国禁を破つて国外に脱出、幸いにも米国・欧州に学ぶことを得たその成果で、これらの国々で「学校の組織教育の制度等を初めとして、凡そ事の学政に関する者は、聊か之を観察講究することを得、其の周到善美を尽せるを觀て感益々切なり。惟らく抑々欧州文明が燦爛として其光輝を宇内に発射せしものは、主として教化の恩沢に因らざるはなし」(同上書)。彼は米国より故国日本に歸る以前すでに「教育」に関する絶大な抱負をいだき、それを実現すべく帰国したのであつた。私のいう日本キリスト教史はしばらくおくとして、日本のキリスト教の歴史において教育についてのかかる識見と意欲をもつたのは新島をもつて嚆矢とするに誰しも異存はないであらう。「唯だ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、基督教主義を以て徳育の基本と為せり」(同志社大学設立の旨

意)一八八八。これが第一点である。

(2) ところで、この教育に関する経緯を、新島は同志社大学の設立で実現しようとした。「若し夫れ此事(同志社大学の設立―大内挿入)を目して基督教拡張の手段なり、伝道師養成の目的と云う者は、未だ吾人が心事を知らざる人なり。吾人が志す所の者、尚ほその上に在るなり。吾人は基督教を拡張せんが為めに、大学校を設立するに非ず。唯だ基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ(中略)更に此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんとするのみ」と(同上書)。同志社はキリスト教主義学校であるが、伝道者養成の学校にする意向はないと力説している。これはまた新島の優れた見識で、キリスト教主義学校(カレッジ)すなわち神学校もしくは準神学校にみられがちであり、實際神学部(神学校)中心に設立され、他に普通学部もあるが、神学部の子科的存在であつたり、便宜的な英文科系統のものが多かった。これにたいし新島はキリスト教主義学校といえども、神学部とは全く別個の独立した広い学問の世界がある。それは神学とは範疇を異にする世俗的な学問として新島が厳密に區別したかどうかわからないが、「神学科の外に於て、政事・経済・哲学・文学・法学」など専門学科を擁してはじめて大学なのである(同上書)。これが他に類をみない新島のキリスト教主義に立つ大学の教育構想である。これが第二点である。

新島を目して日本キリスト教教育史にのせるとき俄然異彩・光彩を放ってくるといったのは、右の二点にあると言

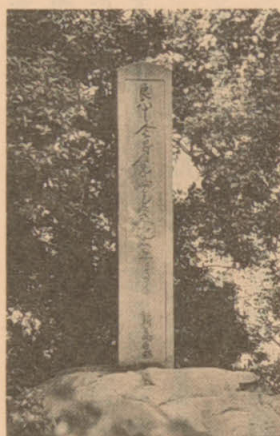


いたいが、キリスト者にして教育に情熱をもつ者だけが担わねばならないものに学校経営にからむ経済問題がある。

「同志社大学設立の旨意」にも正面きつて訴えている。「然りと雖も私立大学は、実に大事業なり、之れを設立するには、多くの人を要するなり、多くの金を要するなり」と。

それは教会形成とはケタちがい、それだけに外国ミッションからの独立などと簡単に言い切れない新島の一面がうかがえるが、それにしても明治期において、キリスト教主義学校経営の邦人責任者として新島ほど独力で募金に東奔西走した者はいない。一八九〇年そのため中途にして生命を燃焼しつくした。新島に関する前にいっていた視点をかえて、日本キリスト教教育史から見たら、巨大な人物として現われてきた。この衝撃は小さくはなかった。してみると、私のいう日本キリスト教史は日本キリスト教教育史とは全く乖離したものか、それとも後者を容れるに足りない矮小なものか反省しきりである。「新島襄」について貧しい私の日本キリスト教史研究は考慮を余儀なくされている。

(日本プロテスタント史研究者)



良心碑

## 新島襄との出会い

山下忠規

私の新島襄、同志社との出会いはアメリカ、ニューヨークランド、アーモストではじめられた。

イエール大学で七年間、神学、聖書殊に旧約聖書神学を勉強していた私はその間、その目を巾東に向けていて、日本にはあまり関心がなかった。博士課程を終えて縁があってマウントホーリヨーク大学で教えることになったが、もう今から二十五年も前のことになる。この大学は女子大学で、その創始者メリーライオン女史はキリスト教的女子教育の先駆者である。大学創立以来、アーモスト大学との関係が深く、地理的にも近く、よい兄妹校である。この大学に就任してすぐ、友達にさそわれてアーモスト大学に新島襄と内村鑑三の肖像画を見に行った。私の新島との最初の出会いである。肖像画の他にも新島が上海から乗ってきたという船の絵も学長室にかかっていた。それ以来多くの日本の方々がアーモスト大学とこの肖像画を見に来られた。私も屢々このような方々の案内をするようになった。一方、アーモスト大学とマウントホーリヨーク大学とは、五大学連合のうごきが始まったので、私のアーモスト大学との関係は深まっていった。また、アーモスト大学を通じて、私の同志社大学との関係も深まっていき、同志社関係の沢山の方々と親しい交友を結ばせていただくようになった。ま

た、アメリカのリベラルアーツ校からなる同志社大学での留学生プログラム、つまりAKPの創立の時から、その運営の詳細にいたるまで私もかかわっていたので、同志社大学との関係もいよいよ深まっていた。しかし私の新島についての関心は、相変らずお客さんを連れて例の肖像画まで案内するのにとどまった。

もう十年近くも前になるだろうか。私の新島についての関心を急回転させる出来事があった。或る八月の午後、同志社のアーモスト・サマープログラムから電話がかかってきて、タングルウッドでやっているボストン交響楽団の演奏を聞きに行くから一緒に行こうと言うことになり、早速用意をととのえて、アーモストでチャーターのバスに乗り込んだ。バスの中に学生仲間からちよつとかけはなれた老人を一人見付けた。その方の隣に座席をとって自己紹介を各自してから色々と話し始めたら、この方は同志社大学新聞学の名誉教授の和田洋一先生とわかった。ボストン交響楽団の演奏をきいて、帰路についてのはもうかれこれ十一時を過ぎていた。帰りのバスも和田先生の隣に座らせていただいて、前も隣も学生がいびきをかいて寝ている間にお話を伺った。先生は昭和の思想史を生きて来られた方にふさわしく、白樺派の文学から、トマス・マンやヘルマン・ヘッセのお話を次々として下さった。同志社大学の歴代の学長のお話やあれこれのエピソード等についても私のさそい水につていろいろと話して下さったけれど、新島のこ

とについては何一つお話にならなかった。

丁度その頃、同志社大学法学部の伊藤彌彦さんがアーモストにきておられた。次の日の朝伊藤さんと話している中に、和田先生は、本当は新島が同志社を創立する為に演説したラトランドの教会におでかけになりたいのだが、交通も不便だし、どうしたらいいのか困っておられるということとをきいた。早速、私は自分の車を出して、伊藤さん同伴で、和田先生をラトランドまでお連れする事になった。

その日の夕方ラトランドにつき、三人でホテルに泊り込み、次の日の朝を待った。その日は日曜日で、例の教会は礼拝に来る人で一杯であった。教会の牧師は私も前に知り合いだった人だったので、私達三人は特別な歓待を受けて教会中を案内してもらった。新島の記念の碑の前で、老先生は幼子のようにはいしゃいで写真をとったり、とられたりしているのが印象的だった。

アーモストへの帰途、またまたトマス・マンのこと、マルクス主義思想のこと、明治初期の反キリスト教運動のこと等、話はつきなかつた。私はこの先生が新島襄をどう見て、どんな伝記を書いたのだろうと言う好奇心にかられ、家に帰ってから早速、和田洋一著『新島襄』日本基督教団出版局発行を手にしてむさぼるように読み切った。これが私の本当の新島との出会いであった。

もと官僚志望だった私のまず興味をひいたのは、新島の明治初期の官僚との出会いであった。最初は、後の文部大臣になった森有礼、それから田中不二麿、木戸孝允と続いていく。そしてドイツのウィースバーデンで、木戸に連れ



られてきた青木周蔵と品川弥二郎に会っている。青木は後に外務大臣となつて、同志社大学設立のために多額の寄付をしたことも知つた。私にとつて特に興味があつたのは、いわゆる赤狩りで検挙された和田先生が、新島の官をどう扱つたと理解しているかということであつた。しかし、そこには官に対する宿怨も、おもねりもみえず、ただたんと資料にもとづいて筆をとつている新聞記者の冷静さがあるのみだつたことである。ことに、あの有名な「イエス・キリストの奴隷」のせりふの扱い方はその一番いい例ではないかと思つた。官を代表する田中不二麿がよく人材を文部省にえようとするのに対して、新島の同志社創立の急務を感じているせりふは生々しい。業をにやした田中が述べたこの言葉に魂をうちこんだ新島の姿が描き出されていると。

もう一つ後で思い合せるのは、和田先生の伝記の一節に「マジメ人間の道楽」というのがあることである。新島はマジメ人間で何一つ趣味も道楽もない男だつたけれど、あして東西を走り回り、同志社の募金募集の為に旅行していた、その旅行が彼のただ一つの道楽だつたというのである。私は和田先生自身の姿を、新島の姿と二重写しに見ているような気がした。

ラトランドからの帰り、若き溢れる伊藤さんもかなりのびていて、昼食もろくろく食べなかつたのに、和田先生だけ一人ピンピンしていて、水の中に放された鯉のように若々しかつたのを記憶している。新島もこんなだつたのかなと思つたことであつた。

今年は、人文科学研究所の客員として私は同志社にまたお世話になつてゐる。八十五歳になられた和田先生とも、昔のお話などして楽しい一時を過す事が出来るのを大いの特権と思つてゐる。

(マウントホーリヨーク大学教授)

## 新島襄と植村正久

高橋 昌郎

新島襄と植村正久とは、新島が大先輩であり、両者の活躍した時期には、ずれがある。新島の亡くなつたのは明治二十三年（一八九〇）であるが、植村は明治二十年に一番町教会を創設したばかりで、ようやく伝道の成果をあげてきたときであり、植村の本格的活動は新島の死後といつてよい。新島は欧化の盛んな時代に生き、植村はナシヨナリズムの高まる時期に本格的な活動を開始した。したがつてこの両者を並列して比較することは適切ではない。しかし一般に明治キリスト教界の指導者として、この両者の名が並んであげられることが多いので、ここでも両者を観察するのにな、その批判を紹介することから始めたい。

まず、小崎弘道はいう。「是迄の日本の基督教界に三人の優れた人があつた。その一人は新島襄氏で、此人は品性崇高で維新時代の志士の風がありました。もう一人は本多庸

一氏で、此人は人物の規模が大きく政治的才能のあつた人でしたが、基督教に對する理解は深いと言へない人です。その次は植村正久氏で、前の二人とは全く異つた性格を有して居ました。基督教の精神をよく理解し、日本の基督教会の基礎を据へたのは彼の功績です」(『福音新報』第一五三八号)。

つぎは十八歳の徳富蘇峰が、明治十三年、下谷一致教会の牧師職に就いたばかりの二十四歳の青年牧師植村に初めて会つたときの印象である。

「新島という人は眉目清秀の立派な風貌の人だが、この正久翁は、例の調子で人障りがまことに悪い。大胡座をかいで、君は何しに來たかと言つた風で、新島に較べるとまあ書生の毛の生へた位にしか思はれなんだ。これは飛んでもない奴にぶつかつたわい、これはまたどうした牧師だらう……というのが先づ私の植村翁に對する第一印象さ」、「彼のフアンの多くは貧乏人と書生(尤も彼らは精神的に富める者であつたかも知れないヨ)であつて、所謂外護者にその人がなく、さうした方面が、不充分であつたのは、甚だ残念な話。もしもそれが充分であつたなら、神学社も福音新報も、もつと大を成したであらうに」と(『植村正久と其の時代』第一卷「彼の全貌」)。

ところで、植村正久が初めて新島裏に接したのは明治八年で、在米十年、アメリカでの教会生活が身についた新島が帰国したばかりの時で、植村は十九歳であつた。新島は、アメリカン・ボードの宣教師補の資格で宣教師としての任命書を受け、また、日本においてキリスト教主義の学校を

設立するために五千ドルの寄付を受けていたほどに、会衆派キリスト教会において信頼されていた。そのうえ、在米中に、岩倉使節団の理事官田中不二麿の欧米教育事情調査を手伝い、新政府首脳からの信任も厚い新進洋学者でもあつた。

これに反して植村正久は、明治六年の受洗、植村が新島に對してもつにいたつた関心は、その所属する横浜公会が七年二月、在米中の新島を牧師として招聘することに決し、惣代奥野昌綱が「大徳望新島愛兒座下」(『植村正久と其の時代』第三卷「教会合同」と記した長文の手紙をしたためたことに端を発している。横浜公会は無教派を理想とし、J・H・バラを仮牧師として組織された。しかし、宣教師らの態度は、ややもすれば教派主義に傾こうとしている。このうへは、せめて日本人の信者だけでも一致協同してその主義を貫こうとの志望から、当時アーモスト大学にあつて会衆派に属し神学を学びつつあつた新島七五三太を牧師として招聘することに決した。そのころ横浜においては、湯浅治郎が在米の新島への通信をバラに依頼したり、さらに、摂津第一公会の設立者D・C・グリーンが聖書翻訳のため神戸から横浜に移住してきてからは、新島の名を耳にすることが多くなつていた。新島のロマンチックな渡米談や、その後の苦学、また、岩倉遣外使節の首脳である岩倉・木戸・大久保・伊藤らに重く用いられた評判などが、横浜公会の人々の間における新島の価値を高めたことは大なるものがあつた。こうして横浜公会では、新島を牧師として招聘す



ることになった。奥野昌綱の草した招聘状は、切々として胸をうつものがある。

さて、植村は、大正十一年の『福音新報』（二三八四号）に回想記をのせている。そのなかで、明治七年に新島が帰国したばかりのときの説教、祈禱会での様子を、「余り窮屈な甚だ旧式なものであった」と記している。それが、のち、明治十七・十八年、新島が二度目の洋行から帰ってきたときには、次のように、以前よりも高く評価している。新島は、アメリカで余程新しい神学の思想をうけて変化してきた。もつともこの変化については、二度目の洋行で変ったのではなくて、同志社設立以後、日本の学生に揉まれて、すでに余程変っていたのであると説明する同志社出身の猛者もいたと記している。さらにつづけていう。「其の日本語の説教や演説は屢々非常な出来栄で、多大の感動を聴衆に与へたのである。第一其風采はどう見ても立派な紳士として、何処かに重みと愛嬌とを具へて居た。言はば人格的磁力に満ちてゐたやうに感ぜられた。第二、音調も語勢も威あつて猛からず、自ら人を動かすものがあつた。第三、彼は情熱の人で、其意気亦壮烈人の心を引き着くるものを持つて居た。彼が演壇に立つ時は何人と雖も敬意を払つて傾聴せざるを得なかつたのである。而して題目と機会とが適合して居た場合には同一のことを述べても、其れが彼の口より出づる時は幾倍も其勢力を増したのである。彼は所謂其程の徳を具へた人であつた。明治十五六年の頃かと覺ゆ。全国基督者の大親睦会が東京に催された時、築地新栄

教会に開かれた聖餐式に於て彼は説教したのであるが、満場の聴衆感極まりて涙に咽ぶもの甚だ多数であつた」、「新島襄は海老名氏、宮川氏の如き雄辯豪談の人ではなかつたが、時と場合に依りては其言説に驚くべき威力があつた。確に多く得難き人格者であつたこと疑はぬ」と。しかし、明治三十六年、デイヴィスによる『新島襄先生伝』（再版が刊行されたとき、植村は『福音新報』（明治三十六年八月）に辛辣な新島批評を載せている。それは新島を目して「我輩の見る所を以てすれば日本に於ける基督教の進路に横はる恐る可き誘惑」とするものである。この点に外国ミッシヨンに対する両者の基本的な相異点がかがえる。

（聖泉女子大学教授）

### 《編集余録》

新島襄全集第三卷『書簡編Ⅰ』をお届けしたのが一九八七年十月に入ってからであつたから、また一年半余を経過したことになる。

第四卷『書簡編Ⅱ』も上梓にいたるまでに慮外の日子を費やし、ご迷惑をかけることになったことをお詫びしなければならぬ。しかし、ようやく現在の段階における新島襄書簡の全貌を世に示すことになった感慨は深い。

昭和十七年六月出版の『新島先生書簡集』、昭和三十五年二月出版の『新島先生書簡集続篇』の両書の編集は森中章

光氏のなみなみならぬご努力によってでき上がったものであるが、前書が出てすでに半世紀に近く、後書もはや三十年を迎える。森中章光氏はなお矍鑠として執筆に、講演にご活躍され、本書のなることを待望しておられる。そうしたなかで、新島襄全集編集委員会は氏の業を継承し、これを発展・充実させることに努めたが、なおこのたびの上梓において忸怩たる思いのあることは否めない。もっとも深いその一つは、書簡の原本に立ち帰って、その校訂を進め、これを確定した「史料」として書簡編に呈示することができなかつた数多くの書簡が含まれていることである。

それは先きの森中氏の編集作業後、原本の所在の移動がげしく、その在りかをつきとめて、これを照合する作業ができぬまま、ついに複数の稿本によって対比して書簡を示した例の多いことである。新島襄書簡の発掘は、時の巡りのなかで、今後その機会にめぐり合うことであろう。そのこと自体、新島のさらなる全体像の形成にかかわることであり、きわめて大きい喜びであり、その機会に恵まれることを惓望するものである。そして、そうしたおり、複数の稿本による対比によって示した新島襄書簡の体裁も、併せて克服されることを願うのも、また切なるものがある。

本巻の表紙の見返しは、前は小崎弘道に李白の「梁甫吟」の一節を墨書して圈点を付し、その傍に赤インクでマタイによる福音書二二・二〇をしるしている。なお徳富猪一郎宛（65号書簡）には、この聖句の抜き書きはない。新島の教会合同問題に関する深い洞察の那辺にあるかを、このこと

はきわめて象徴的に示している。後の見返しは横田安止に宛てた書簡の末尾に示される「畢生之目的」を伝えている部分である。この書簡の中ほどには、「益良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」のくだりがある。その一節は昭和十五年十一月、良心碑として建てられた。碑背には次の文が刻まれている。

新嶋先生同志社大学運動中東京ヨリ在校ノ一学生ニ与ヘタル書簡中ノ一節ヲ録ス、先生永眠五十周年ニ際シ追慕ノ余、門生胥議シ之ヲ先生故郷ノ産確氷石ニ勒ス

昭和十五年十月 蘇峰 徳富正敬書

石ハ社友半田善四郎君ノ寄贈ナリ

月報に掲げた写真は今出川キャンパス正門を入ったところにて建てられている良心碑である。

口絵の新島襄の肖像は第一巻所収の肖像とともに湯浅治郎長男、湯浅一郎の筆になるもの、大ききは51.6×44.7cmである。右下隅にYusaのサインが見える。大磯臨終図は民友社・国民新聞社の久保田米僊の筆になる。「故新島先生長逝状景画四葉」のうちの一つ、大きさは28×36cmである。

本月報の執筆は新島襄に関する研究の地平のさらなる展開を思つて、新島襄、日本組合基督教教会、そして同志社を内なる立場でなく、いわば外から見のお立場からの新島襄像をご呈示頂いた。ご繁忙のおり、ご執筆を頂いたお三方のご厚誼に対し深謝するとともに、基礎のなつたこの土俵の上に花が咲くことを念じている。



# 新島襄全集

The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima

IX 報月  
第 9 卷  
1994年 10 月

## 〈目次〉

明治二十二年頃の通信事情	松井 全	1
容閣について	伊原沢周	5
編集余録	杉井六郎	8

同朋舎出版

京都市中京区新町通  
四条上ル小結柳町428

## 明治二十二年頃の通信事情

松井 全

新島襄の資料を調べていると時折おもしろいものに出くわす。たしか明治二十年か二十一年頃米沢から京都へ一週間かかって送られてきた書簡がある。消印だらけのこの書簡は米沢↓横手↓水沢(北上川船便)↓石巻(船便)↓神戸↓京都という、現在から見れば常識外れのコースをたどっている。これが当時の通常のコースだったか、あるいは特別な事情によるものなのか、不明である。

\*

\*

\*

第八巻「新島襄年譜」が一昨年七月に刊行されたのち、各方面からさまざまな意見をいただいたが、その中に次のようなご批判があった。

第八巻では、新島へ送られた手紙(以下、宛書簡と略称)についてその発信月日を書いているが、新島が受け取った日を書いていない。人は手紙を受け取ってから、それに対

応する行動を起こすものだから、新島がその手紙をいつ受け取ったのかを書かなければ意味がない、というものである。宛書簡は約一千通、第九巻で取り上げているものだけでも八百九十三通ある。言うのは簡単だが、いちいち手紙を収蔵庫から出して消印を調べなければいけない、その手間が大変である。だいぶん逡巡したが、思い決して第九巻編集手伝いの途中、明治二十二年七月からの書簡を調べてみた。

新島宛ての書簡には封筒が残されているものが多く、しかも概して保存状況が好い。ただし開封の際、一部を切り取るから切手・消印が害なわれている場合があるが、一応二百五十通近くを調べてみた。その一部、明治二十二年後半部を地域別に整理したのが、文末に掲載した一覧表である。

新島は手紙を受け取ると、封筒の上にその日付を書く、読み終えたと大きな×印をする。手紙の内容により「Keep」とか、「何日返書出す」とか「返書に及ばず」と書くことがある。

明治二十二年頃の手紙は都市の規模により集配の回数が異なっていたようである。その概要は次の通りである。

市内地の集配 一日 一等十二回——八等一回

市外地 一日 一回

集配の回数 (最多地域) イ・ロ・ハ・ニ・チ・リ・ヌ・

ル・ヲ便

同じ「イ便」でも土地により時間が違う。

集配の間隔 東京では明治十六年に一日十九回(十五分間隔)が最多であったという。

スタンプ 一日十二回だと二十分ないし三十分間隔か。一通の郵便物に発信局印(切手の上)／經由局印／着信局印を押す。したがって一通の書簡に二つ以上のスタンプが押してある。

スタンプの型式は丸一型日付印で、上から局名／日付／便号を記している。これは明治二十一年七月に統一された日付印のようである。

さて、かんじんの到着日数であるが、文末の一覧表を参考にしながら読んでいただきたい。

当日配達

東京中心…関東の主要都市、福島

ヲ便が最終便

京都中心…大阪、神戸、名古屋

リ便が最終便

翌日配達「東京中心…京都、神戸  
京都中心…前橋、大宮郷、水戸、磯部、有馬、

今治、岡山、高浜

京都を中心として見るならば、

① 北海道から船便で一週間／瀬戸内沿岸からは翌日配達／九州各地からは四日ないし一週間で到着する。

② 関西の八月二十二日・二十五日の項に摂津湯山とあるのは六甲山北麓の有馬のことである。また二十二日付では発信が二十三日二便・着信が二十三日イ便、二十五日付では発信二十六日ハ便・着信二十六日ロ便となっており、地域により配達時間帯が異なることを示している。

③ 明治二十二年十二月より山城京都今出川局の消印が登場する。このため配達が一日遅れる。今出川局の所在地は未調査である。

④ アメリカ東部地域から約一カ月、欧州のベルリンから約六週間である。

⑤ 武蔵大宮郷は現在の秩父市、上野磯部は現在の安中市である。なお上野磯部、伊香保は軽井沢が登場するまで避暑地として知られていた。

明治二十二年頃の郵便は、現在想像もできないくらい能率よく運営されていた。新島は、東京はじめ関東諸都市・京阪神地区からの書簡を発信の翌日読むことができた。タイム・ラグはそれほど大きくはなかった、と言える。なお、郵便物の消印・集配事情等について通信総合博物





10 ・ 7	9 ・ 30	8 ・ 25	8 ・ 22	8 ・ 22	8 ・ 19	早天 8 ・ 14	8 ・ 11	4 PM 8 ・ 5	7 ・ 22	7 ・ 1	〔関西〕			9 ・ 4	8 ・ 30	7 ・ 31	〔中部〕			10 ・ 27										
〔摂津大坂川口〕	〔山城京都〕	〔摂津大坂〕	〔摂津湯山〕	〔摂津神戸〕	〔山城京都〕	〔播磨明石〕	〔山城京都〕	〔播磨明石〕	〔播磨明石〕	〔播磨明石〕	〔播磨明石〕	〔播磨明石〕	〔播磨明石〕	〔山城京都〕	〔若狭高浜〕	〔山城京都〕	〔摂津神戸〕	〔山城京都〕	〔尾張名古屋〕	〔山城京都〕	〔越後新潟〕	〔山城京都〕	〔尾張名古屋〕	〔武蔵東京〕	〔上野松井田〕	〔武蔵東京〕				
22 ・ 10 ・ 7	22 ・ 10 ・ 1	22 ・ 10 ・ 1	22 ・ 8 ・ 26	22 ・ 8 ・ 26	22 ・ 8 ・ 23	22 ・ 8 ・ 23	22 ・ 8 ・ 20	22 ・ 8 ・ 19	22 ・ 8 ・ 15	22 ・ 8 ・ 14	22 ・ 8 ・ 12	22 ・ 8 ・ 11	22 ・ 8 ・ 5	22 ・ 8 ・ 5	22 ・ 7 ・ 23	22 ・ 7 ・ 22	22 ・ 7 ・ 1	22 ・ 7 ・ 1	22 ・ 9 ・ 4	22 ・ 9 ・ 4	22 ・ 9 ・ 2	22 ・ 8 ・ 30	22 ・ 7 ・ 31	22 ・ 7 ・ 31	22 ・ 10 ・ 28	22 ・ 10 ・ 28	22 ・ 10 ・ 27			
二便	口便	口便	口便	口便	ハ便	イ便	チ便	イ便	ニ便	ハ便	ヘ便	口便	イ便	ハ便	口便	チ便	ニ便	リ便	口便	ヘ便	ホ便	リ便	口便	リ便	ハ便	リ便	口便	ル便	口便	ヲ便

8 ・ 15	8 ・ 10	7 ・ 30	7 ・ 22	九州				10 ・ 7	9 ・ 12	8 ・ 31	8 ・ 23	8 ・ 18	7 ・ 26	中・四国		12 ・ 15	10 ・ 21	10 ・ 21	10 ・ 10											
山城京都	肥前佐賀	山城京都	筑後柳川	山城京都	筑後久留米	山城京都	肥前佐賀	山城京都	伊予今治	山城京都	備前岡山	山城京都	讃岐高松	摂津湯山	備中倉敷	山城京都	備中高梁	山城京都	伊予今治	山城京都	今出川	山城京都	紀伊下里	武蔵東京	山城京都	武蔵東京	摂津神戸	山城京都	但馬津居山	山城京都
22 ・ 8 ・ 20	22 ・ 8 ・ 15	22 ・ 8 ・ 16	22 ・ 8 ・ 13	22 ・ 8 ・ 3	22 ・ 7 ・ 31	22 ・ 7 ・ 29	22 ・ 7 ・ 23	22 ・ 10 ・ 8	22 ・ 10 ・ 7	22 ・ 9 ・ 14	22 ・ 9 ・ 13	22 ・ 9 ・ 2	22 ・ 8 ・ 31	22 ・ 8 ・ 24	22 ・ 8 ・ 23	22 ・ 8 ・ 19	22 ・ 8 ・ 27	22 ・ 7 ・ 26	22 ・ 12 ・ 23	22 ・ 12 ・ 22	22 ・ 12 ・ 20	22 ・ 10 ・ 23	22 ・ 10 ・ 22	22 ・ 10 ・ 22	22 ・ 10 ・ 21	22 ・ 10 ・ 12	22 ・ 10 ・ 10	22 ・ 10 ・ 7		
へ便	口便	ち便	ハ便	ホ便	口便	ニ便	ハ便	へ便	ハ便	ニ便	ハ便	ち便	ニ便	口便	口便	ニ便	口便	口便	口便	ハ便	リ便	イ便	ち便	口便	ち便	ニ便	ホ便	ニ便	ニ便	



9・2	肥後熊本	22・9・3	へ便
9・4	山城京都	22・9・7	二便
9・4	肥前高島	22・9・5	空欄
9・4	山城京都	22・9・8	二便
9・4	筑前比良松	22・9・6	イ便
9・6	山城京都	22・9・9	チ便
10・1	肥後熊本	22・9・7	イ便
10・1	山城京都	22・9・10	ホ便
10・21	日向都濃	22・10・2	ハ便
[その他]	山城京都	22・10・7	ト便
	日向宮崎	22・10・21	ニ便
	武蔵東京	22・10・21	チ便
7・14	Dochester, Mass. Jul. 15, 1889 4PM		
	Boston, FD Jul. 16, 1889		
	Yokohama, [Japan] 20 Aug. 1889		
	山城京都	22・8・22	ハ便

## 容閑について

伊原 沢 周

この小論は『新島襄全集』の刊行にあたって、中国人容閑の略伝を述べて、その対比とその検討を進める手立てとしようとするものである。

中国人留学生として初めて渡米した若者は容閑（一八二八―一九二二）である。容は、アメリカで高校、大学生として過ごし、一八五四年イエール大学を卒業して中国に帰った。アメリカ合衆国の合理主義と自由・民主主義を享受

した彼は、祖国の封建的、非合理的旧体制、旧社会を改めなければならぬという強い信念を抱いていたが、当時中国の現実に合わせて、その願望を実現させることは、とうてい彼一人の力ではできなかった。

一八六三年、すでに三十五歳となった容は、やつと両江総督の曾國藩にその才能を買われ、五品の低い官位を得て清朝政府の役人となった。在職中、中国の近代化に関するいくつかの優れた建議を政府に申し入れたが、政治改革に直接参加する資格も機会も与えられなかった。にもかかわらず、中国の近代化を考えると、容閑の役割を無視するわけにはゆかないと思われる。

さて、容閑は一八二八年十一月十七日、広東香山県（今の中山県）南屏村に生まれた。南屏村は、マカオから西南にわずか数キロ離れた寒村であるが、西洋文化の先進地であるマカオと隣接しているのも、その環境は、他の地域より西洋教育との接触に有利な条件が備わっていた。

容閑の父は、貧しい農民で、正規の伝統的儒学の学校に容閑を進学させる力がないので、一八三五年に七歳の容閑をマカオへ連れて行き、同地の学費免除、食事・宿舍も無料提供されるというギュツラフ夫人のミッシェンスクールに入学させた。同校で聖書、英語などを勉強したが、三九年に同校が廃校となり、故郷に帰った。やがて父は病死し、家計を助けるため、容閑は南屏村やマカオでアルバイトをしていたが、四一年十一月、ギュツラフ夫人の世話によつて容閑は、マカオのモリソン学校（後に、香港へ移転）に

入った。約六年在学し、四七年一月に同校の校長S・R・ブラウンに連れられて香港からアメリカに渡ったのである。

アメリカでの容閔は、ブラウンの世話を受け、マサチューセッツのモンスン学園に進学した。一八五〇年の夏、モンスン学園を卒業してイエール大学に進学した。在学中の得意科目は英作文で、一等賞を受けたことがある。大学の最後の年に、自分の将来の抱負について、西洋の教育・文化を通じて中国を一新させ、文明・富強の近代国家を築き上げたいと語っている。

一八五四年、二十六歳の容閔は、イエール大学を卒業し、同年十一月アメリカから香港に帰り、香港・上海両地の英米人の通訳を勤め、その後、茶間屋を開業した。当時中国の現実にはぶつかった容は、立身出世の困難さを初めて味わったようだ。一八六〇年十一月、太平天国の首都たる南京を訪問し、旧友の洪仁玕に面会した。洪は香港在住中に、西洋文化に接し、太平天国の指導者洪秀全との親戚関係によって一八五八年に香港から南京へ行き、干王という首相に任命され、国政を執った。容閔はこの時期、中国一新の念願を太平天国に託そうとしたのか、政治、経済、軍事及び教育に関する改革意見を洪に出した。洪は諸王と相談した上でこれらを実行しようとしたが、容閔は、太平天国内部の矛盾と権力構造の混乱を見透して、同年十二月下旬、南京より上海へともどった。その後、彼は上海で茶の販売によって富を作り、その財産で中国の教育を振興しようとした。やがて著名な数学者李善蘭と交わり、李の推薦によ

り曾国藩に任用された。

曾国藩は、太平天国を鎮圧するため、中国での近代的軍需工場を建設しようとして、その工場の機械購入の任に容閔を当たらせた。一八六四年の春、アメリカに向かった容閔は、約百数十種類の機械を買入れ、上海に持ち帰った。

これらの機械は、後に中国における最初で、かつ最大の近代軍需工場たる上海江南製造局の基礎となった。その功績を認めた曾国藩は、六五年十月に、五品候補知事という官位を容閔に与えた。容閔は在任中、江蘇巡撫の丁日昌を通じて北京の総理衙門に四つの提案を示した。すなわち(一)汽船株式会社の創設、(二)留学生の派遣、(三)鉱産資源の開発、(四)領事裁判権の回収というものである。その中で、より重要なのは、留学生のアメリカへの派遣である。

留学生派遣の案に賛成した曾国藩は、それを光緒皇帝に上奏し裁可を受けた。七二年の夏、留学生の副監督に任命された容閔は、第一期生の留学生三十人を率いてアメリカへ渡った。翌年、直隸総督李鴻章の依頼を受け、全権委員としてペルーに向かい中国人苦力の虐待実況の調査を行った。その功によったものか、七五年の冬、駐米副公使に任命された。その頃、米人M・L・ケログと結婚した。また、イエール大から法学博士の学位をも得た。しかし、在米留学生教育の問題をめぐる容閔の意見は、駐米初代公使兼留學生の監督である陳蘭彬と対立した。いうまでもなく、この対立は、容のアメリカの教育観と陳の中国の伝統的儒教の教育観との食い違いによるものであった。結局、一八八



一年に清朝政府は、留米学生全員、約百人を中国へ召還するとともに、在米留学生事務所をも廃止した。この措置に對して、容閔は憤慨きわまりなかった。八二年、中国一新に絶望した容は、北京へ赴き、官職を辞退して米國に歸つた。その時、もう五十四歳だった。

歸米後の翌年、愛妻のケログが病死した。この一連の不運に見舞われた容閔は、八二年から九五年まで、約十三年間忘れられたようにさびしい日々をアメリカで過ごしている。九五年に至り、湖広總督張之洞の招きで歸國し、日清戦争後の中国政治改革に関する諸問題をめぐって張總督に助言したが、相互の意見が合わずじまいに終わつた。

九五年八月、政治変革派の団体である「強学会」が成立し、康有為・梁啓超らを中心にして推進した変革運動の氣勢が、いっそう高まつた。この運動に對して容閔は、全面的に声援し、銀行設立、鐵道建設などを政府に建議した。九八年（光緒戊戌の年）の秋、西太后によつて變革派を打倒するクーデターが起こつた。当時北京に在住していた容閔は、生命の危険を感じ、北京を脱出して上海の外國租界に住居を定めた。上海で“Deliberative Association of China”（中國審議會、すなわち唐才常の中國々會）を組織し、初代会長に選ばれた。やがて唐才常の自立軍蜂起が失敗し、唐も張之洞に逮捕処刑された。容閔の政治一新の夢はかなく破れたのである。

一九〇〇年九月一日、上海から日本に渡る途中、容閔は船中で革命派首領孫文に初対面した。この折、容閔は孫文

の革命計画に大いに賛成の意を表した。容閔の中國一新の考えが變革から革命へと移行したのは、おそらくこの頃だったと見られる。

一九〇一年の春、容は台灣に渡つて台灣總督兒玉源太郎を訪れた。その後、台灣から香港へ赴いた。香港で洪秀全の甥洪全福、孫文の興中會メンバー謝纘泰・李紀堂らとを糾合して、廣東で革命蜂起の計画を企てた。一方外國の援助を求めるため、容は、一九〇二年五月、香港からアメリカに渡つた。やがて洪・謝・李らの革命蜂起計画が清朝政府に發覺したので、容閔は、そのままアメリカに留まることになった。一九〇九年の冬、革命資金を集めるため、孫文はイギリスからアメリカに渡り、容閔と會見した。容閔の紹介によつて孫文は、米人 Homer Lea へ Charles B. Booth との關係を結び、革命資金の募集問題を持ち出して、ともに相談したが、結論を得ないまま武昌革命蜂起が勃發し、清朝政府が、ついに崩壊して終わった。

一九一二年一月、孫文は、南京で中華民國臨時大總統に就任した。その時、孫は容閔に親書を送り、革命政府に参加することを懇請したが、容は、高齢病弱の故をもつて辞退した。同年四月二十一日、容閔は、アメリカで八十四年の生涯を閉じた。

容閔の自伝“*My Life in China and America*”は一九〇九年に出版された。同書で、曾國藩を高く評價しているのに対して、李鴻章、張之洞に批判を浴びせている。周知のように、太平天國革命を契機に、漢族の大官が輩出し、



曾国藩↓李鴻章↓張之洞らは、事実上、清末における政治実権を握っていた。曾は適材適所の原則に基づき、容に適当な地位・任務を与えた。しかし、一八七二年に曾が死亡し、その後、李・張二人は、容閔の漢学教養が低いことによるからか、洋学一辺倒の容の建言をほとんど受け入れなかった。これは、また容閔が李・張に非難を加えた一因だろう。確かに完全な英米教育を受け、中国の伝統的儒学はもちろん、漢文さえも十分に書けないほどの容閔は、封建的中国社会では存在しがたい。清末の近代啓蒙思想家の中で、容閔は、漢学・洋学兼備の王韜や嚴復らには及ばないけれども、時代に応じるその思想と行動への転換は、王・嚴らよりはるかに鋭い、だからこそ、容閔は、曾国藩の洋務運動から康有為の変法（革）運動へ、さらに変法運動から孫文の革命運動へと進んで行く。また、容の自伝によれば、「中国の将来を担う世代の人々に、私のような教育を受けさせ、西洋の教育を通じて中国を振興しようとする」との決意を示している。この信念によって彼は、中国の幼童百二十人を四回に分けてアメリカへ送り、同国で直接西洋の教育を受けさせた。この留学の発案は、中国近代化上にきわめて重要な意義を持っている。しかし、中国の伝統文化に対する認識の不足、ならびに変革に関する体系的理論の欠如は、容の挫折と失敗との主な原因だと考えられる。

新島襄の生涯、その抱懷した信仰・思想と容閔のそれを対比し、その共通する位層と姿勢、ならびに著しい相違点を抉剔する作業はすべて今後の課題であるが、まず容閔に

見られる自らの伝統文化からの乖離は「近代化」への立脚点のきわめて著しい相違点であることを『新島襄全集』（第五卷、日記・紀行編）に目を通して痛切に感じている。

（追手門学院大学文学部教授）

### 《編集余録》

余滴として与えられた紙幅は僅かである。巻頭に掲げた口絵写真について記して、その責をふさぐこととする。

この新島襄の油絵肖像の原画は同志社チャペル正面講壇の背後に、今も掲げられている。この肖像画の作者は、若王子神社の杜掌の家に生まれた伊藤快彦（やすひこ）（一八六七—一九三六）である。彼は京都府画学校に学び、東京で小山正太郎、原田直次郎に師事し、京都に帰って浅井忠と関西美術院を創設して院長となり、京都洋画壇の開拓者の一人であった。画伯の生前に会って、この画作の次第を聞いた田中良一は一九六二年の二月、新島生誕記念で、次のように述べている。

「伊藤快彦は新島先生とは全く面識がなかったが、明治二十三年、原田直次郎画伯に師事していた折、国民新聞や国民之友が追慕の記事を掲げているのを見て、その生涯を知り、しかも、その人が自分の杜領の上の山に葬られたという因縁に想い至り、是非画像を試作してみたいと思ひ立つて、当時新聞や雑誌に出ている木の目本版の挿画をたよりに、この肖像を画いたという。それはその真や実をうつつに見ることのできなかった人の像を画いて、「伝神写照」の妙を得たものと言えよう」と。私もひそかに、年月を経て「伝真写照」を思う。

（杉井六郎）